魔法少女リリカルなのは～憧れのアニメの世界へ～

千歳鷲介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～憧れのアニメの世界へ～

【Ｎコード】

Ｎ１１８４Ｌ

【作者名】

千歳鷲介

【あらすじ】

主人公は高校とさほど変わらない大学生活を過ごしていた。平凡な日常にうんざりしていたある日、突如自分の目の前に空から少女が落ちてきた！？その娘はなんと完全な神になるために修業中の女神だった。そんな女神の少女との出会いによって今までの平凡な日常から、自分の憧れの世界に行くことになった主人公の原作介入物語です！

オリジナルキャラ設定（前書き）

主人公が最強設定になるため、最強設定が苦手な方は読まれると面白くないかもしれませんので気をつけて下さい。

オリジナルキャラ設定

名／神童　零一（シンドウ　　レイ）

性別／男

年齢／１８歳（リリカルなのはの世界に到着時は９歳になっている）

誕生日／２月１４日

身体／髪・眼の色は黒、体格は中肉中背、利き腕は右（顔は地味で冴えないどこにでもいるようなものだったが、誰が見てもカッコイイと思う顔に変わった）

趣味／ゲーム、アニメ、マンガ（ようするにオタクである）

好きなもの／二次元の女性（とくに幼女）

嫌いなもの／めんどくさいこと

魔法／ミッド式＋ベルカ式＋オリジナル

魔導師ランク／　ＥＸ

魔力変換資質／炎・電・氷・？・？・？

魔力光／　黒

バリアジャケット／モチーフはＦａｔｅのアーチャー

稀少技能／？？？

本作の主人公。
性格は人見知りが強くほとんど他人とは関わらない暗い性格・・・だったが！自分の憧れのアニメの世界に来たことで明るく、気が強くなり友好的になった。しかし基本のところは変わらずめんどくさがりである。

名／イリス

性別／女

年齢／？？？

誕生日／？？？

身体／髪は雪のような白で眼は金色、身長は零より頭一つ分ほど小さい。

趣味／人間観察

好きなもの／甘いもの

嫌いなもの／　悪

完全な神になるために修業中の女神。師匠である神様に人間界に落とされて気絶しているところを零に助けられた。性格は天真爛漫と表現するのがピッタリで、正義感が強く義理堅い。

零のデバイス設定

名／レグルス（インテリジェンドデバイス）

待機形態／銀色の腕輪

戦闘形態／多種類の武器

リリカルなのはの世界では絶対に必要と言ってイリスに設計させてできたデバイス。零の魔力にも耐えられるようになっており、カートリッジシステムも搭載済み。マスターには絶対服従で寡黙な性格。イリス曰く、緊急時用のプログラムが組み込まれているようだが・・・

オリジナルキャラ設定（後書き）

これから本編ですが、駄文ですので見てくださるだけで感謝です！

第一話　天界での出来事（前書き）

ここから本編開始です！

小説を書いていると自分の才能の無さが実感できます・・・そんな駄目作者の作品ですが読んでいただけたら幸せです。

第一話　天界での出来事

～天界～

「お師匠様～～～！！課せられたメニューを全て終わらせてきました！」

「うむ、予定よりかなり早く終わらせられたようじゃなイリスよ。」

「はいっ！私はお師匠様のような立派な神に早くなりたいですから」

私ことイリスは、今日も完全な神になるためにお師匠様のもとで修業中です。

「お師匠様！これで完全な神になるための試験を受けさせていただけますよね？」

「・・・・・（そろそろ第二段階の修業に入らせるかの）イリスよ、お前は人間のことをどれだけ知っておる？」

「えっ！？人間ですか・・・自分の私利私欲の為に争いを起こし、自分が痛い目にあわなければ学ばない愚かな生き物では？」

そう、私は人間が嫌いだ。人間ほど悪を生み出すものはいないだろう。

「やはりな・・・イリス、お前にはまだ試験を受けさせることはできん。」

「えっ！？」

私はその言葉を聞いて驚いた。今までどんな課題も完璧にこなしてきたのでついに試験を受けられると思っていたのに、お師匠様はまだ駄目だと言ったからだ。

「お前には今から人間界に向かってもらう。そして、一人の人間にパートナーになってもらい人間のことを学んでくるのだ。」

「人間をですか！？しかしお師匠様・・・」

「これも修業、頑張ってきなさい。」

そう言うとお師匠様は自分の杖を天に向け、その瞬間落雷が私に落ちてきました。

「なにをっ・・・！くぅ！！うああっ・・・・！」

意識が落ちる寸前に、お師匠様が言ったことが私にはわからず、なぜ人間なんかを学ばないといけないのかと思ってそこで意識は完全に途切れた。

第一話　天界での出来事（後書き）

始まったのに主人公を出せませんでした・・・

今回はイリスが人間界に落ちる話を書かせていただいたので、次話でやっと主人公が登場です。

読者様に読んでいただいて誤字・脱字、感想などがいただけたら感謝感激です！

それでは次話でお会いしましょう！

第二話　はぁ？・・・・・これ、なんてアニメ？（前書き）

第二話でようやく主人公登場です。

話をまとめるのが上手くできない駄目作者です。本当は二話目でなのはの世界にいけるかなと思っていましたが無理でした・・・

第二話　はぁ？・・・・・これ、なんてアニメ？

「零・・・起きて」

ーん、せっかく気持ち良く寝てるのに、誰かの呼ぶ声が聞こえてくる。

「ほら起きて。早く起きないと遅刻するよ？」

確か今日は日曜日だったはずだ。大学が休みだからといって昨日アニメをずっと見ていたからな。

「もうっ・・・しかたがないなぁ・・・」

というよりさっきから聞こえる女の子の声は一体誰だ？俺は自分の部屋で寝ていたはずだが。

目を覚まして確認しようとした時・・・

ドサッ！！

『くっ！いてぇ・・・なんだよ夢かよ。』

どうやら昨日見ていたアニメのおかげか、女の子に起こされるという嬉しい夢を見ていたようだ。

『まっ、起きてみればこれが現実か・・・』

目を覚まして回りを見てみれば、なんら変わりのない自分の部屋だった。

『あ～今何時だ？ってもう2時すぎかよ！どうりで腹がへってるわけだ。』

俺は時間を確認すると台所に置いてあるカップ麺を適当に選んで食べた。

『さ～て今日はこれからどうするかな・・・おっ！そういえば今日は新作のゲームが発売されるから店で予約しておいたっけ。それでも買いに行ってやりますか♪』

予定を決めて、軽く外に出られる格好に着替えた後すぐさま家を出た。

店に歩いて向かっている途中に、明日の大学のことを考えて憂鬱になった。

俺は高校卒業後、別に行きたかったわけでもない大学に入学しつまらない毎日を過ごしている。人見知りが強い俺は高校でも大学でも、友達というものがあまりできず暇さえあれば、ゲームをやったり、アニメ、マンガを見ていたのでかなりのオタクになりさらに友達ができなくなっていった。

『この何も変わらない日常には、これからもずっと耐えないといけ

ないのか・・・』

そんな独り言を呟きながら店に向かって歩いていると

――――――――

『んっ？なんか変な音が聞こえるな？』

――――――ヒュゥウゥ

『あれ？なんかどっから聞こえるかわからんが、この音近づいてきてないか？』

ウゥウゥ――――――――ツッツドッガァン！！！！！

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

はぁ？』

変な音が聞こえて近づいてくると思ってたら、いきなり10メートル先の道路に何かが落ちてきて、爆発が起こったかのように地面がえぐれていた。

『えっ？ちょっ！なんだ！？何が起こったんだこれ！隕石かなんかか？』

いくら非日常を望んでる俺でもいきなり起こった目の前の現状にパニクっていた。

『・・・・とりあえず何が落ちてきたか確認するか・・・』

そう思って何かが落ちたところに恐る恐る見に行くと

『・・・・・女の子？』

そこには真っ白い綺麗な長髪の女の子が倒れていた。

『って！？大丈夫か！？まさか落ちてきた何かに巻き込まれたとか？いや・・・でもとくに外傷はないけど・・・って言ってる場合じゃねぇ！こういう場合は救急車を呼ばないと！・・・ってケータイ家に忘れてきた！！こういう時に限ってないとか・・・このままだとまずいし、とりあえず家につれていくか。』

それからの行動はいつもの自分からは考えられないほど素早かった。女の子を運ぶ時に、普段異性に関わらず苦手な俺でも遠慮なく背中に背負えた。運ぶ最中に気になったのは、なぜあそこに倒れていたのかともう一つ、女の子の背中には天使のような羽がついていた。

『・・・コスプレなのかな・・・』

第二話　はぁ？・・・・・これ、なんてアニメ？（後書き）

こんな作品を読んでいただきありがとうございます！

次話ではもう少し長くかけるよう頑張っていきたいと思うので、どうか駄文をお許しください。

第三話　そういえば・・・新作のゲーム買ってやりたかった！（前書き）

今回は自分で書いていて長くなってしまったような気がしましたが、
書くことになれてないだけでした・・・・・ｏｒｚ

それでは第三話をお楽しみください！

第三話　そういえば・・・新作のゲーム買ってやりたかった！

イリス　Ｓｉｄｅ

「ん・・・ここは？」

私が目を覚ますとどこかわからない部屋のベッドに横になっていた。ここはどこだろう？というより私はあの後、一体どうなったのだろうか。そんなことを考えていると、家の鍵が開く音がした。

イリス　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ガチャ！

とりあえず自分のベッドに寝かせておいた女の子のために、食料などをコンビニに買いに行ってアパートに戻ってくると女の子が目を覚ましていた。

『あっ！目が覚めたんだ。よかった～！このまま起きなかったらどうしようかと思ってたよ。』

そう話しかけると女の子はかなりの警戒心と怯えをもった目で俺を見ていた。・・・なんか女の子にこういう目で見られると、かなりショックだな・・・

「あの、聞きたいことがあるのですがいいですか？」

どうしたもんかなと、考えながら買ってきたジュースを冷蔵庫にいれていると女の子がようやく話しかけてくれた。

『あぁいいよ。こっちも聞きたいことがあるから、そちらからお先にどうぞ！』

あまり異性と話さない俺は内心ドキドキしながら、できるだけ落ち着いてそう言った。さて、どんなことを聞かれるのかなと思っていると

「あなたは人間ですか？」

と女の子は聞いてきた。

「ってあれ！？あのどうしてそんなに落ち込んでるんですか？」

・・・ハハハ、そりゃ俺は異性から見たらかっこよくもないですよ。前に地味で目立たない奴とか言われたことだってありましたよ。だけど・・・真顔で人間ですかとかこんな可愛い子に言われたら、そりゃトラウマになるほど落ち込みますよ・・・

『モチロンニンゲンデスヨ・・・』

必死に心のダメージを我慢しながらそう言うと

「やっぱり・・・ここは人間界なんだ。多分、あの時お師匠様が私をこっちに送るときに意識がなくなっちゃったんだ。」

聞き取れないくらいの小さな声で何かを呟いていた。

『いや～倒れてる君を見た時は本当にびっくりしたよ。それで今度はこっちが聞きたいんだけど、どうして君があそこで気絶していたか教えてくれる？』

今度はこっちから質問してみると女の子はビクッと体を震わせて言おうか言わないかを迷っていた。

『あぁ、言えないこととか思い出せないことなら無理に言わなくてもいいんだけどね。』

女の子が困って悩んでいたので、俺がつけくわえるようにそう言うと女の子はやっと声をだして

「私は天界から修業のためにやってきた女神です。」

と言った。

イリス　Ｓｉｄｅ

私は自分が人間界に来たことと、目の前にいる男の人が人間だとわかって怯えていた。天界にいたころに、人間は恐ろしく、私達のように力があるものでもそれさを利用して争いを起こすと教えられて、悪を許せない私は人間が嫌いになり同時に恐れるようになった。

『――――――どうして君があそこで気絶していたか教えてくれる？』

そう聞かれて私は答えていいかどうか迷った。もし自分が人間ではなく神だとわかったら、この人はどうするのだろうか・・・そんな

ことを考えていると

『あぁ、言えないこととか思い出せないことなら無理に言わなくてもいいんだけどね。』

優しそうな笑顔を向けて男の人はそう言った。その顔を見て、私は意を決して自分のことを話すことにした。

「私は天界から修業のためにやってきた女神です。」

思いきって言うと、男の人は長い間呆然とその場に立ち尽くして

『えっと・・・女神っていうと・・・神様？』

信じられないといった声で恐る恐る聞き返してきた。

「はい。まだ修業中の身ですがそうなります。」

それから私はこれから人間界でパートナーになる人物を探していること、そしてそのパートナーから人間を学ばなければならないことを話した。

一通り話し終えた後、

「この度は助けていただきありがとうございました。つきましては、私にできることなら貴方の願いを一つ叶えて差し上げましょう。」

と私は言った。それを聞いた男の人は驚いて私を見ていた。どうやら私はこの人に助けられたようだから、どんな願いでもできることなら叶えて恩をかえさなければ・・・そう［どんな願い］でも・・・

しばらく待っていると、思いついたのか、目を閉じていたのを開いた。私はその願いを聞くために目を閉じた。

イリス　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

正直聞いてる時は信じられなかった。だってそうだろ？倒れていた女の子を助けるだけでもありえないのに、その女の子が女神だったなんて・・・だけど、話しをしてる時の顔は真剣で言っていることが冗談じゃないってのがわかった。全部を聞き終えた後、女の子が願いを一つ叶えてくれると聞いた時は驚いた。だけどその言葉を言った後の彼女は何かに怯えているようで　・・・俺は願いを思いつき彼女に言った。

『名前を教えてくれないか？』

俺の願いを言うと女の子は一瞬聞き間違えたのではないかと思ったのか

「あの、すみません。もう一度言ってくれませんか？」

『いいよ。君の名前を教えてくれない？』

もう一度言うと何を言ってるんだろうこの人みたいな目で見られた・・・やめて！そんな目で俺を見ないで！

「・・・私はてっきりパートナーになって命令をきけとか、世界を征服する力をよこせとかそういうのだと思っていたんですが」

『いやいや！そんな大それたお願いなん

て出来ないよ。俺としては女神様の名前を教えてもらえるだけで十分。それで、君の名前は？』

「あっ、はい。私の名前はイリスです。」

『イリスか・・・俺の名前は神童　零！零って呼んでくれればいいよ。』

「わかりました。零さん。しかし名前を教える以外の願いはないんですか？さっき言ったこと以外なら叶えますけど・・・」

『ん～～と、じゃあ敬語をやめてタメ口で話して！』

「それもこちらとしては楽なんですが・・・」

『それじゃあこれならどうだ！一緒に飯を食おう！』

俺的にはかなりの願いを言ったはずだ！だってこんな可愛い子に名前を呼ばれて飯を食えるとかこの先一生あるかないかだよな！

「ハハッ！おかしな人！」

その時初めてイリスの笑顔を見た。

『それでイリス。これからどうするんだ？』

俺はコンビニで買ってきた夕飯をイリスと一緒に食べ終わった後に聞いてみた。

「うん。これからパートナーと行動して人間を学ぼうと思うんだ！

パートナーももう決まってるの。」

『そうか・・・じゃあイリスとはこれでもう会えなくなるんだな・・・』

俺はそれを聞いた瞬間、かなり落ち込んだ。せっかく自分が望んでいた非日常がこれで終わってしまい、明日からまた変わらない毎日を過ごすのかと・・・それならイリスにパートナーになってくれってお願いするのもよかったかもな～とか涙目になりながら考えていると、イリスが真剣な顔をして俺の顔を見ながら言ってきた。

「零！私のパートナーになって！！」

『・・・・はっ？はぁぁぁぁぁぁぁ！？パートナーって・・・あれ、でも、もう決まってるって？』

「うん！貴方の願いを聞いたときからパートナーになってもらおうと決めてたんだ！」

『そっ、そうだったのか・・・でも本当に俺なんかでいいの？』

「もちろんっ！よろしくね零！」

『・・・ぁあ！こちらこそよろしくイリス！・・・それでパートナーっていっても何をすればいいんだ？』

「え～と零は何かやりたいこととかある？パートナーのやりたいことを叶えてその間に人間を学べっていう修業なんだけど。」

『そのやりたいことっていうのは何でもいいの？』

「まぁ神にしろとか、世界を滅ぼせとかはさっき言った通りできないけどそれ以外なら大抵できるよ！」

『じゃあじゃあ！アニメとかゲームの世界に行くとかできる？』

「それなら簡単だよ！零が考えた通りのキャラとかで行けるよ。」

『ＭＡ☆ＪＩ☆ＤＥ☆ＫＡ！？それなら、俺がずっと憧れてたこのアニメの世界にこういう感じのステータスで行っても？』

「フムフム。まぁ大丈夫だよ。あっ！でもこの世界には戻ってこれなくなるよ。零がいなくなった後に、私と出会う前の零がこの世界に残ることになるから。そうしないと世界に歪みができて大変なことになるからね。」

『そうなのか・・・わかった！それじゃあよろしく頼むイリス！』

「オッケー！任せといて！」

そういうとイリスの目の前に光り輝くゲートができた。イリスが手を差し出してきたので、俺はその手を握ってゲートの中に入った。その瞬間、眩しくて何も見えなくなり意識もなくなった。

第三話　そういえば・・・新作のゲーム買ってやりたかった！（後書き）

作者〔いや～やっと三話目にしてなのはの世界に行けたよ〕

零［ていうか文才なさすぎだろ！グダグダかきすぎなんだよ］

作者〔ぐっ！そんなのわかってるやい！私だってもっと才能が欲しかったよ〕

零［まぁないもんはしょうがないか。好きだから書いてんだろ？］

作者〔も・ち・ろ・ん・ＤＡＺＥ！〕

零［はいはい、わかったから。ほらこんな駄文を読んで下さっている読者様に言わないと］

作者〔はっ！そうだった！こんな作品を変わらず読んで下さっている読者様に感謝感激です！〕

零［で、今回は俺とイリスがパートナーになる話だったか］

作者〔そうだね。いや～それにしてもイリスは最初、零に怯えまくってたね〕

零［だな、まぁイリスにはこれから人間も悪いやつばかりじゃないことをわかっていって欲しいもんだ］

作者〔・・・（最初の零の犠牲者はイリスか）・・・〕

零［おいっ！どうしたんだいきなり黙りこくって？］

作者［いや、なんでもないっすよ♪それではこれからも読んで下さる読者様！また次話で！］

第四話　今まで生きてきてよかった～。って本気で思った一日！！（前書き）

ついになのはの世界に介入です！

これから先に書かないといけない戦闘シーンにうまく書けない絶対の自信があります！

第四話　今まで生きてきてよかった～。って本気で思った一日！！

皆さんどうも！神童　零です。イリスとパートナーになって、俺が好きなアニメの世界に行くためにイリスと一緒にゲートを通ったんだけど、気がつくと俺は……

『ってなんだよこれはぁ！？こんなの聞いてないってぇぇぇぇ！！！！！』

只今地上が見えないほどの高さから落下中という状況です。

「フフ♪今かなり面白い顔になってるよ零」

『笑ってる場合かイリス！！こちとら恐すぎてもう意識がなくなる寸前だから！！！』

一緒に落ちているイリスは、空を飛ぶことに慣れているのか、パニックになっている零を見て楽しそうに笑っていた。

「まぁまぁ、まずは落ち着いて、落ち着いて」

『……あぁ、なんかどうしようもないと諦めたら落ち着けたよ……それでイリス、この状況は一体どうなってるのさ？』

「う～んと零が行きたいって言ってたリリカルなのはの世界に着いたんだけど、出現場所を特定してなかったからここに出て今の状況に…って感じだね」

『マジで？本当になのはの世界に来れたのか！？……それじゃあ！俺にも魔法が使えたり……』

「そうだね、説明するより自分で使ったほうがわかるんじゃないかな？」

そう言うとイリスは銀色の腕輪を出して俺に渡した。
「これが零に頼まれてた……デバイス？だっけか。とりあえず言われた通りに作ったから今すぐにでも使えるよ」
『……これが俺のデバイス……』
「零？どうかしたの？急に黙っちゃって…もしかしてデザインで何か気に入らないとこでもあった？それなら新しく作り直すｋ《ガシッ！！》っっっ！？――――／／／零！？どうしたの急に抱き着いて！？
『ありがとうイリス！！めちゃくちゃ嬉しいよ！こんなカッコイイやつ作ってくれて！』
俺は嬉しさのあまりにイリスを抱きしめてしまった。普段の俺なら女の子に自分から触れることも出来ないのだが、感情を抑えられず、気にもならなかった。
「あっ…うん…気に入ってもらえて良かったよ――――／／／／」
イリスは今まで男の子に抱き着かれたことなどなかったので、顔を真っ赤にして俯いてしまっていたが、零はデバイスに夢中で気にしてなかった。
『よしっ！まずは名前だよな、お前の名前は…レグルス。小さな王って意味でレグルスだ。これからよろしくな！』
「ｓｉｒ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」
『じゃあ次は起動か。アニメを見てずっとやってみたかったんだよな♪』
俺はレグルスを右腕につけて目を閉じて集中した。
『我、使命を受けし者なり。契約の元、その力を解き放て。風は空

に、星は天に。そして、不屈の心は…この胸に！この手に魔法を！
レグルス！セット！アップ！』
「ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ　ｓｅｔｕｐ」
起動パスワードを言い終わるとレグルスから膨大な黒い魔力光が溢れだした。

『……ぉお！本当にバリアジャケット着れたよ……』
光が収まって自分の姿を確認してみるとさっきまで着ていた服ではなく、俺がイメージしたＦａｔｅのアーチャーの外装になっていた。
レグルスは腕輪のままだ。　『……て
いうかあれ？バリアジャケットはいいんだけど、なんか俺の体小さくなってないか？』

バリアジャケットを確認したので気づいたが、かなり身長が縮んでいるようだ。気になったので、まだ顔を赤くしていたイリスに聞いてみた。

『なぁイリス。俺の体なんで小さくなってるんだ？』「……っは！？えぇとね！零から聞いた話だとアニメの主人公が９歳だって言ってたから、その年齢にしといたの。それとね、これは余計なお世話かもしれなかったけど…顔のほうも誰が見てもカッコイイと思うほどに美形になってるよ。」
そう言うとイリスは鏡をだして俺に自分の顔を見させた。
『これ誰！？どこのギャルゲーのイケメンですか！？』
そこには見たことのないイケメンがいた。ていうか俺だった。

「もし嫌なら前の姿に戻せるけどどうす『いや！！このままでお願いします！！』

さて、自分の状況も状態も簡単には確認できたし……まずは今まで完全逃避していたこの落下してるのをどうにかしますか。なんか地上も見えてきたし。

『レグルス頼むよ』

「Ｆｌｉｇｈｔ　ｗｉｎｇ』

レグルスがそう言うと、俺の背中に魔力でできた黒い翼がでて、やっと落下から止まった。イリスも自分の羽を使って止まっている。

『魔法だ……俺、魔法使ってるよ……』

あまりの感動に呆然としていると、

「お～い！！大丈夫？とりあえず地上におりて家に帰ろう？こっちの世界での戸籍とか家は適当に作っておいたから」

『えっ！！イリスそんなことも出来るのか！？』

「へへ～ん♪修業中とはいえ女神だから、こんなのは簡単だよ！」

あまり無い胸をはって嬉しそうにしているイリスの凄さを改めて実感しながら、なんとか誰にも見られることなく地上におりることが出来た。

『ありがとうレグルス。元に戻してくれ』

「　ｓｉｒ　」

魔法が解除されバリアジャケットから元の服装になった。

『ここが……海鳴市か。本当に来れたんだな』

それからイリスの案内で着いたのは、高級そうなマンションだった。エレベーターに乗って自分達の番号の場所に向かい部屋に入った。

「ここが私達が住む家だよ！それで、これが家の鍵で私と零で一本ずつ♪」

『ありがとう。おおっ！かなり広いな！前に住んでいたアパートとは比べものにならないな。キッチンとか風呂とか部屋も綺麗だし』

いろいろ家の中を見ているとそういえばと思いイリスに聞いてみた。

『なぁイリス。俺達の関係ってどんな感じになってるんだ？』

俺は9歳だし、イリスは……まぁ20歳前半に見えるから家族っていうとギリギリではあるがいけると思うが……そう思いながらイリスを見ると、

「えっ！？――――私達の関係って……そんなまだ早いよ――――／／／／／今日会ったばっかりで私は女神だし……でも、零が嫌いって訳じゃなくてその……どちらかと言うと……」

『お～い？イリス？何を顔真っ赤にしてぶつぶつ言ってるんだ？この世界だと俺達は家族かなんかなのか？』

「……だから……ってああ！！そういうことね…！え～と、零の両

親は二人とも亡くなって親戚の私が預かっているってかんじかな」
『なんか苦しいような気もするが…じゃあ金銭面のほうは？」
「私、人間界にきたの初めてだからどれくらいあればいいかわからなくて……とりあえず1番高い紙幣をあっちの部屋にいくらか置いておいたよ」
『そっか…それは仕方ないな。出来れば一ヶ月くらいの生活費があればなんとかしてバイト探すんだけど……』
いくらぐらいあるのか確認するために、イリスが指差した部屋を開けると

『……』

閉めた。見てはいけないものがあったのですぐさま閉めた。

「どうかな零？やっぱり足りなかった？」
『……いや、もうお金の心配は（一生）しなくても大丈夫……』
「それなら良かった～！……ふぁ～……じゃあ、今日はもう寝よう、私眠くなっちゃった……」
『そうだな…他にも、これからの事を決めていこうと思ってたけど、今日は本当にいろいろあったしもう寝ようか』

そう言って自分の部屋を決めてから、かなりでかいベッドに入って寝ようとしたが……

『……なんでイリスは俺の部屋についてきてるのかな？さっき自分の部屋を決めたよね？』
「―――／／／／／……い…ょに……」
『えっ？ごめん聞こえなかったからもう一度』
「……一緒に寝よ？」

グハッ！！！涙目＋服の袖をちょんと引っ張るとか……これは……ダメだろ……

『いや！それはさすがに！だって俺も男だし…っても今小学生か……だけど！』

「一人は怖いよ……だからお願い……」

それを聞いて、イリスを見ると小さくだけど震えてるのがわかった。

『……わかった。じゃあ一緒に寝るか』

「っ！！ありがとう！零」『だけど毎日じゃないからな、たまにだけだからな」「え～……わかった」

俺がベッドに入ると、イリスも入ってきて体を寄せてきた。

近い！近い！近い！近すぎですよイリスさん！

イリスの顔を見ないように背中を向けていると、すぐに後ろから寝息が聞こえてきた。

『……おやすみ、イリス』

その日、零はもちろん一睡もできなかった。

第四話　今まで生きてきてよかった～。って本気で思った一日！！（後書き）

作者〔どうも皆様！変わらずこの作品を読んで下さり感謝感激です！今回は零の毒牙に一人犠牲者が……これからもさらに増えていくのですが……〕

零［……ｚＺＺ］

作者〔コイツ…本編で寝られなかったから後書きで寝てやがる！せっかくゲストが来るってのに……まぁ仕方ない。それではゲストのイリスどうぞ～！〕

イリス［どうも！イリスです！今回はよろしくお願いしますね！］

作者〔じゃあそろそろコイツを叩き起こしますか〕

イリス［あ、あの！できればそのまま零を寝かせておいてくれませんか？］

作者〔別にいいけど…なんで？〕

イリス［えっと……一緒に寝た時なんですけど、ずっと私のほうに背中を向けていて零の寝顔を見れなかったから見ていたいな～と思って……／／／］

作者〔……（完全にフラグ立てやがったな零のやつ）それなら寝かせたままでイリスに質問していいかな？〕

イリス［はい！答えられるものなら］

作者〔じゃあ、イリスは寝る時一人だといつも恐がってるの？〕

イリス［え～と…普段はそんなになんですけど、やっぱり……その……人間界に初めて来たので……］

作者〔なるほどね～それで零と一緒に寝て欲しかったと〕

イリス［零はたまにだけって言ってたけど、毎日一緒がいいな～……］

作者〔まぁ、それは零に頼むしかないな。それではこの作品を読んで下さった皆様！また次話で！〕

イリス［次も読みに来てくださいね♪］

第五話　零　始動！（前書き）

ついに今回でなのはが出てきます。これからは戦闘などもあるので頑張って書いていきたいです。

第五話　零　始動！

現在は夜、辺りは暗く人がいなくなった町を零は走っていた。その速度は人間が出せる速さの限界を軽く凌駕している。

『ちっ……間に合うか？』

■■■■■■■■■■■■■■■

……数時間前

俺はこれからの事をイリスと話していた。

『……じゃあ、俺が原作に介入して歴史を変えても大丈夫なんだな？』

「うん。ここは一つの平行世界だから。でも、私は零の事を信じてるけど……その能力を悪いことに使っちゃ駄目だよ？」

『もちろん！わかってるよイリス。』

俺はこの世界に来る前に欲しい力をイリスに言っていた。その内容は、身体能力はどんな動きもできるほど強くなり、魔力も無尽蔵で無くなることはなく、極めつけには他のゲームやマンガやアニメの技や特殊能力、自分で考えたオリジナルの魔法を使えるようにしてもらった…

『まぁ、これほどチートだとイリスが心配するのもわかるよ……

っと！この魔力反応は！？ついに始まったか！』

イリスと話していると、突然、膨大な魔力反応が空からいくつも現れ、所々に散らばった。

『これは多分ジュエルシードだろうな……ということは今日なのはがユーノと出会うのか』

「えっ？零、じゅえるしーどって何？なのはとゆーのって誰なの？」

いきなり俺がアニメのことを言ったので、イリスが不思議そうな顔をして俺に聞いてきた。

『そっか！イリスは人間界のアニメとかわからないよな。じゃあ夜まで時間があるし、なのはのアニメのＤＶＤでも一緒に見るか！細かいところは俺が説明入れていくから！』

『くぅ～～～！やっぱりみんな可愛いよな！一期を見ると、フェイトは絶対守ってやりたくなるって！』

今はイリスと一緒にＤＶＤを第一期まで見終わったところで、途中に細かい設定などを夢中になってイリスに教えたりした。

「可愛いって……それは確かだけど……私だって頑張れば結構……」

俺が見終わってテンションが上がっている隣で、イリスは俯いてしまっていた。

『さてと、……って！？はぁっ！？もうこんな時間かよ！？アニメに夢中になりすぎて現実に起こるほうをすっかり忘れてた！』

気づくと辺りはもう真っ暗になり、時間的になのはが家を抜け出す頃になっていた。なのはが魔法に目覚めるシーンは絶対に見たいので、俺はイリスを連れて急いで家を飛び出した。

『ハァ…ハァ…なんとか間に合ったか……』

自分でも信じられないスピードで走っていたので、人に見られるとマズイだろうから、認識阻害の魔法を来る途中に俺とイリスにかけておいた。そして今は槙原動物病院を空から見下ろしている。すると突然病院の壁が壊れ、一人の少女がフェレットを抱えて病院から逃げ出した。

『あれはっ！？』

な・の・は・キター！！！！！

『ヤバイって！アニメでも可愛いかったけど実際に見るとマジヤバイって♪』

一人、空の上で悶絶していると

「むぅ……どうでもいいけど零！なんか変な黒いやつに追われてるみたいだけど、助けに行くの？」

何故かイリスがちょっと怒り気味に聞いてきた。

『う～ん…まぁ今回は助けなくても大丈夫だから、このまま様子を伺おう』

そうして空から見ているとなのはがいる場所から、桃色の光が柱となって現れた。

『……うお……凄いなこの魔力……アレは！？まさかの変身シーン！！』

ブス！

『んぎゃぁ～！！！！目が～私の目が～！！！！！』

某大佐の如く、空中でのたうち回る俺。

「ふんっ！零のエッチ！自業自得だよ！」

『いやいやっ！眼球はヤバイって！どっかの吸血鬼もどきも言ってたろ！？』

目が普通に見えるようになると白いバリアジャケットになっているなのはが戸惑って立っていた。

『あ～あ……もう後は封印して終わりだな……』

しばらくすると封印が終わったのか、その場から逃げるように離れていった。

『終わったか……アニメ見た時も思ったけど、かなり酷いなこれ

は』

辺りを見回すと地面はえぐれて、電柱は折れて壁に倒れている。遠くからはパトカーのサイレンが聞こえてきた。

『俺にもできるかもしれないけど……イリスこれ元に戻せる？』

「できるよ！見ててね…」

イリスが両手を前に出すと、白い光が辺りを包み込んで見えなくなり視界が戻ると何事もなかったかのように元通りになっていた。

『ありがとうイリス。それじゃあ先に家に帰っててくれないか？』

「えっ？零はどうするの？」

『俺はこれから一つジュエルシードを見つけて回収してくるよ。多分そんなにかからないと思うから』

「ん～わかった。じゃあ先に帰ってるね。実は結構眠くて……」

そう言って眠そうにしているイリスを先に帰した。

『さてと…いっちょやりますか！レグルス！』

「Ｓｉｒ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

レグルスを起動させバリアジャケットに着替えてジュエルシードの魔力を広域探知魔法で探してみた。

『え～と……一番近いのは……おっ！あったあった！』

ジュエルシードのある場所に転移魔法で行くとそこはどこかの公園だった。

『危ねーとこにあるな…子供が拾ったら大変な事になるだろ…さてどこにあるかなっと…』

かなり広い公園だったので探すのがめんどくさそうだなとか思っていると、いきなり離れたところでジュエルシードが発動した。

『くそっ！発動前に回収したかったがしょうがない！これになのはも気づいたんだろうが、今会うとめんどくさい……ふっ！』

意識を集中させると、地面に黒い魔法陣が現れて公園全域に結界を張った。

『……よし！かなりの魔力を込めて展開させたからなのはも入ってこれないだろ。さてさっさと終わらせますか…』

なのは　Ｓｉｄｅ

私がユーノ君とお家に帰っていると、突然さっきと同じ嫌な感じがした。

「ユーノ君！今のはもしかして？」

「うん！間違いないよ。ジュエルシードだ！ごめん……またあなたを危険な目にあわせてしまうかもしれない……」

「…大丈夫だよ！それにさっき言ったよね。なのはって呼んでって？」

「……っ！うん！ありがとう、なのは」

「それじゃあ行こうか！……あれっ！？さっきあった反応がなくなっちゃった…どうなってるのユーノ君？？？」

「僕にもわからない……発動しなくなったのか、それとも‥ 誰か‥ が封印したのか……だけどこの世界に他に魔法を使える人がいるはずが……」

なにもわからずじまいだったので、とりあえずユーノ君と一緒にお家に帰ることになりました。一体どうなってるのかな……

なのは　Ｓｉｄｅｏｕｔ

『これは……小さい子が見たら泣きだすぞ……』

俺の目の前には、巨大な女の子の人形が立っていた。しかし、目と腕が片方ずつ無くなっている。多分壊れてしまったので公園に置いていってしまったのだろう。

【帰りたい・・・お家に帰りたいよ～～～】

『……訂正、大人でもこれは恐いです……さて、バカなこと言ってないで封印するか…レグルス！』

「Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔｕｐ」

右腕についているレグルスの回りに虹色の花弁が開いたように円を作った。右腕を巨大な人形に向け

『…俺が家に帰してやるよ……ジュエルシードシリアル９！封印！』

「Ｓｅａｌｉｎｇ」

腕輪から八本の黒い光が放たれて人形を貫くと、人形から青い宝石が出てきた。

『これがジュエルシードか……』
「Ｒｅｃｅｉｖｅ　Ｎｏ．？」
腕輪の宝石の部分にジュエルシードが入り、そして人形は元のサイズに戻って地面に落ちていた。
『持ち主のところに帰りたかっただけなんだよな……』
俺はその人形を拾うと、さっきイリスがやったように人形に魔力を込めて元の姿に戻した。そして、人形の記憶をたどって持ち主の家を確認した後、その家の玄関に人形を置いて自分の家に帰った。

『ただいま～。あ～疲れた……今日はさっさと汗を流して寝るかな』
俺は家に帰った後、まっすぐ風呂に向かいシャワーを浴びて自分の部屋に入った。
『で、なんでイリスが俺のベッドで寝てるんだ？』
ベッドを見ると、気持ち良さそうに寝ているイリスがいた。
『……今日はリビングのソファーで寝るか……』
たまには自分のベッドでゆっくり寝たいな～と思いながらソファーに寝転がり、これからどうやって原作に介入していくかを考えながら意識がゆっくりと落ちていった。

第五話　零　始動！（後書き）

作者〔皆様ど～もです！今回はやっとなのはが出てきました。が、零とはまだ会っていない状態ですね〕

零［この駄目作者！！早くなのはとフェイトに会わせやがれ！］

作者〔ちっ……（これからコイツがハーレム作っていくのを考えたらイライラしてきた）……〕

零［おい！黙ってないでなんか言ったらどうなn］

作者〔死ね！この野郎！（右ストレート）〕

零［……っうお！危ね～な、いきなり何すんだ！］

作者〔外したか……〕

零［ったく、いきなり意味わかんね～な……で、これからどうすんのか考えてんのか？］

作者〔まぁ～ね……一応次話でなのはとフェイトに零が会うようにしようかなと……〕

零［マジかよ！楽しみだなぁ♪ってあれ？イリス？いきなり来てどうしたんだ？］

イリス［……］

零［あれ？ちょっ！？痛い！痛い！待って！？どこにつれて行k……］

作者〔……零が連れて行かれていなくなったので今回はこれで。この作品を読んでくださっている皆様には感謝感激です！それでは次話で！〕

第六話　白と黒の魔法少女（前書き）

今回は今までで話が一番長くなりました。

戦闘がわかりにくいかもしれませんが、どうか許して下さい…それでは始まります！

第六話　白と黒の魔法少女

？？？　Ｓｉｄｅ

「ロストロギアは、この付近にあるんだね……」

雲が多く、月が見え隠れする夜。とあるビルの屋上に、黒いマントを羽織り、手には斧型のデバイスを持った金髪のツインテールの少女が立っていた。
すぐ近くには赤い毛並みをした大型の狼が座ってる。

「形態は青い宝石、一般呼称はジュエルシード……そうだね、すぐに手に入れるよ……」
「ウォ～～～～～ン」

夜の街に狼の遠吠えが響き渡った……

？？？　Ｓｉｄｅｏｕｔ

一つ目のジュエルシードを封印してから数日がたった。あの後もジュエルシードがいくつか発動していたが、それはなのはに任せた。
俺はその時、イリスと海鳴市を回っていていろいろ大変だった……
…まぁその事はまた後で話すとしよう。

『さて、そろそろジュエルシードを集めに行くか……イリス！ちょっと行ってくるよ！』

自分の部屋にいるイリスに声をかけて、ジュエルシードの反応がある場所に転移魔法で行こうとするとイリスが慌てて部屋から出てきた。

「待って待って！！私も一緒に行く！忘れてるかもしれないけど、私は零と一緒に行動して人間を学ばないといけないんだから！」

『そういえばそうだった……じゃあ、一応俺達の存在がばれないように認識阻害をかけてっと…よしっ！それじゃあ行くか！』

転移場所に着くと、そこにはかなりでかい屋敷があった。

『うわ～……でけ～……ここはすずかの家か……流石金持ちは違うな、俺も一度でいいから住んでみたいよ……』

「え？零こういう家に住みたいの？じゃあ今の家からこういうのに変える？」

簡単そうにイリスが言うので一瞬理解できなかったが、少ししてから思い出した。

『……そういえば、そうすることができる力と金が俺達にはあったんだな……まぁ、二人しかいないのにこんなばかでかい所に住んでもしかたないか。』

そんな話をしていると辺り一帯に結界が張られた。

『これは！？それにこの二つの魔力反応は！！急ごうイリス！』

「あっ！ちょっと待ってよ零！急にどうしたの？」

イリスが何がなんだかわからない様子だったが、俺は急いで魔力反応がある場所へ向かった。

反応がある場所に着くと、二人の少女が対峙していた。

『あそこにいるのは、なのはともう一人は……フェイトか！！』

「ハァ……ハァ……どうしたの零……急に走り出して？」

『俺の記憶が正しければ……やっぱり！！イリスはそのまま認識阻害を解かないでおいてくれ！』

それだけ言い、俺はなのはとフェイトのもとに向かった。

『なのはに怪我なんかさせるかよ……レグルスセットアップ！ソードフォームＴＹＰＥ１！』

「Ｓｅｔｕｐ Ｓｗｏｒｄ ｆｏｒｍ」

なのは Ｓｉｄｅ

「なんで…なんで、急にこんな？」

バルディッシュと呼ばれていたデバイスとレイジングハートが鍔ぜり合いの状態になっている時に、深くて綺麗な眼をした黒い少女に

尋ねた。

「答えても……多分、意味がない」

「くっ！！」

それを聞くと、一度離れるために互いに距離をとった。

「Ｄｅｖｉｃｅ　ｆｏｒｍ」

「Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ」

距離がとれたらすぐにディバインバスターの準備をして黒い女の子にレイジングハートを向けた。むこうも斧型になったバルディッシュをこちらに向けている。

（きっと私と同い年くらい……綺麗な瞳と綺麗な髪、だけど……この子）

そんな事を考えていると、ジュエルシードで大きくなってしまい、さっきまで気絶していた小猫が目を覚ましたので、そちらに目を向けてしまった。

「……ごめんね……」

「Ｆｉｒｅ」

気づいた時にはもう遅かった。目の前には金色の閃光が向かってきていた。やられると思い目をぎゅっと閉じた瞬間、爆発する音が聞こえた。

あぁ、やられちゃった。だけど全然痛くないな……と思ってると、

いつまでも自分の意識が無くならないので閉じていた目をそっと開けると、私は赤いマントを着ている男の子にお姫様抱っこをされていた。

『大丈夫？どこも怪我してない？』
「ふぇっ！？あの、その、はい。大丈夫です」
『よかった！じゃあ自分で立てる？ちょっと待っててね』

そう言って、優しい顔で笑いかけてきたので、私は自分の顔が真っ赤になるのがわかった。下ろしてもらってからその男の子を見ると、手には黒い大きな刀を持っていてあの子と対峙していた。

なのは　Ｓｉｄｅｏｕｔ

危なかった～……今のはかなりギリギリだったからなぁ。さてと、なのはは無事に助けられたし後は目の前にいるフェイトか……

「……あなたもジュエルシードを集めているの？」

今は黒い日本刀の太刀の姿をしているレグルスを見て、フェイトが尋ねてきた。

『いや～別にジュエルシードとかは本当はどうでもいいんだけど、さっきの攻撃はちょっと危なかったからあの子を助けただけだよ。』
「それじゃあ、あなたが持っているジュエルシードを私にくれませんか？」

バルディッシュをサイズフォームにしてフェイトがそう言った。
『それはできない……って言ったら？』
「それじゃあ申し訳ないけど……あなたのジュエルシードを無理矢理でもいただきます」
言い終わった瞬間にフェイトが俺に間合いを一気に詰めてきてバルディッシュを振り上げ俺の頭を狙って振り下ろしてきた。
『っと！ちょっと待てってば！人の話は最後まで聞くもんだって！』
それをレグルスで受け止めるとフェイトはすぐに俺から距離をとって、次の攻撃に備えていた。
「フォトンランサー連撃……ファイア！」
バルディッシュからいくつもの金色の光が俺に放たれた。
「Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ」
『おわっ！？……ったく！少しは人の話をきけよなっ！！！』
それを全て防ぎきると同時に、俺は縮地法と呼ばれる術を使ってフェイトの死角に移動しレグルスを喉元に突き付けた。
「くっ！？……」
『これで俺の話を聞いてくれるかな？』
「……」
負けを認めたのか、黙って俺が言う言葉を緊張した顔で待っていた。

……フェイトにこんな顔させるとか……ちょっと落ち込んできた……っと、フェイトをこの状態でいつまでも待たせる訳にはいかないか……

そう考えて俺はレグルスをソードフォームから待機状態の腕輪に戻した。

『そう恐い顔をしないでくれ。俺はもともと君に危害をくわえるつもりはないから。俺が言いたいのは今日のところはあのジュエルシードは諦めて、代わりにこれで引き下がってくれないか？』

「Ｐｕｔｏｕｔ」

俺はレグルスからＮｏ．９のジュエルシードを出してフェイトに渡した。

「これがジュエルシード……だけどいいんですか？私がもらっても？」

どうしてかわからないといった顔をしているので、なのはに聞こえないようにフェイトに言った。

『俺はフェイトと闘いたい訳じゃないんだ……』

「！？……どうして私の名前を！？」

『まぁそういう訳で今日のところは引き下がってくれないかな？』

「……わかりました。でも次に会った時は負けませんから……」

そう言い残してフェイトは一度俺となのはを見て、その場からいなくなっていった。

『……はぁ……疲れた……後はあのジュエルシードを封印してっと』

俺はレグルスでジュエルシードを封印して回収すると、そこでなのはが話しかけてきた。

「あのっ！さっきは助けてくれてありがとう！……それでお話聞きたいんだけど、あなたの名前は？私はなのは！高町なのはっていってこっちのフェレットは友達のユーノ君」

「初めまして、ユーノ・スクライアです」

『俺は神童　零。零って呼んでくれればいいよ』

「じゃあ零くんって呼ばせてもらうね！なのははなのはでいいよ！それで他にも聞きたいことがあるんだけど……」

（零～～～！！！いつまで私を待たせて女の子と話してるのよ～～！！）

突然、俺の頭にイリスの声が聞こえてきた。

（ああっ！ゴメンゴメン！わかった。今日はもう帰るよ）

『なのは、詳しい話をしたいけど今日はここら辺で……また必ずまた会えるから！！！』

そう言って近くに拗ねた顔して待っているイリスと転移魔法で家に帰っていった。

なのは　Ｓｉｄｅ

「えっ！？零くんちょっと待って！……ってもういなくなっちゃった」

「それにしても、凄い子だったね。魔力が信じられないくらい感じ

られたよ」
「うん…それにあの女の子にも勝ってたし……よしっ！次会った時には、絶対に詳しいこと話してもらうんだ！」
私は初めて会った自分以外に魔法を使える二人のことを考えながらアリサちゃんとすずかちゃんが待つ場所に戻っていった。

なのは　Ｓｉｄｅｏｕｔ

『……なぁイリス、そろそろ機嫌直してくれよ』
家に帰った後、イリスはよほどほったらかしにされたのが気に入らなかったのか拗ねてしまっていた。
「……私以外の女の子とあんなに話して……しかもお姫様抱っこしてた……」
俺に聞こえないぐらいの小ささで何かを呟いて、ソファーに膝を抱えて座ってしまっている。どうしたもんかな～と考えると、机に置いてあったチラシを見てとっさに言った。
『じゃあイリス！お詫びに一緒に温泉に行こう！』
この案がまさかあんなことになるとは、今の俺には予想もできなかった……

第六話　白と黒の魔法少女（後書き）

零［今日は作者がいないので俺とイリスで後書きを担当することになった］

イリス［よろしくね！でも作者さんはどうしたの？］

零［明日、５時には起きないと行けないから少しでも寝ておくだと……まったく馬鹿なやつだ］

イリス［ははっ……まぁそれじゃあしかたないね。さて次話はどうなるのかな？］

零［う～ん……馬鹿作者がいないから詳しくはわからないが話を見る限り温泉かもしれないが……］

イリス［温泉♪零と温泉♪楽しみだな～］

零［そっか！まぁ次話はどうなるかわかりませんが、この作品を読んで下さった皆様には感謝感激です！］

イリス［次話もお楽しみに～♪］

番外編　イリスの報告書（前書き）

今回の話は五話の前にあった内容を書いてみました！
番外編ということで今回はイリスの視点で書いたのでわかりにくいところなどあるかもしれませんが、どうぞ読んでやって下さい！

番外編　イリスの報告書

前略

お久しぶりの連絡になりますお師匠様。イリスは変わりなく、元気にやっています。あっ！もちろん修業のほうもパートナーを見つけて、精一杯人間を学ぼうと頑張ってます！

最初に人間界に自分が来たことがわかった時は、正直恐くてしかたありませんでした。しかし、そんな私を助けてくれたのは一人の青年でした。その男の人の名前は、神童　零といって、私は彼にパートナーになってもらいました。彼は特に見返りを求めて私を助けたわけではなく、そんな彼を見て私は少しずつですが人間の見方が変わってきました。

そういえばこの前はこんなこともありました……

■■■■■■■■■■■■■■■■

今日は零と一緒にこれから私達が暮らしていくために必要な生活用品を買いながら、ついでに海鳴市を回って見ていこうということになりました。

『……男女二人で街を回って遊ぶ……これってもしかしてデートってやつなんじゃ……』

一度も、男の子と一緒に出かけたことなどない私は自分の姿などがかなり気になってしまい、何度も鏡を見て髪などをいじっていた。

「お～いイリス！そろそろ行こうぜ！」
『うんっ！ちょっと待って！すぐに行く！』
零が玄関から私に声をかけてきたので、急いで部屋を出て零と一緒にマンションを出た。

『うわ～……人間がいっぱいいる……』
「イリス……今は他の人にも普通に見えてるんだから、言うことに気をつけないと……ただでさえ容姿が目立つんだから」
街に到着して私が人間の多さに驚いていると、零が苦笑しながら言った。

『目立つってこの髪とか瞳のこと？』
私は自分の白い髪と金色の瞳がそこまで珍しいのか気になって零に聞いてみた。
「まぁ……それもあるけど……その……イリスはかなり可愛いから……柄の悪いやつに絡まれたりしたら嫌だろ？」
『えっ！？そんな……可愛いなんて――／／／／／』
零がそんなことを言ったので、私は恥ずかしくなって顔が赤くなるのがわかった。
「あぁ…えぇと……よしっ！それじゃあ、あそこのデパートにい

ろいろ買いに行こう！」
『あっ！待ってよ！……零ってば！』
逃げるようにデパートに向かう零を、見失わないように走って追いかけた。
デパートでは生活用品や食料などを買って、私は前から欲しかった人間界の服や下着をたくさん買った。荷物が多くなってしまったので、零が一般人にばれないように転移魔法で荷物だけ先に家に転送した。
『それにしてもたくさん買ったよね！……そういえば私が服とか選んでる時に零いなかったよね？どこに行ってたの？』
「ん？…あぁ、ちょっとね……それより！お腹すかないか？まだ昼飯食べてないし」
『そうだね、私もお腹すいちゃった！どこかに食べに行こっか！』
それからデパートを出て、零が行きたい店があるって言うから零についていく行くと、その店は翠屋っていう喫茶店だった。
『ここって確か……前見せてくれたやつにあったお店だよね？』
「ああ！やっぱり一度は来てみたかったんだよ！」
店に入ると女性店員に二人席に案内された。メニューを決めてしばらく待っていると、見たことのあるとても綺麗な人が注文をとりにきた。この人は確か……
『高町　桃子さん……？』
「あら、どこかでお会いしたことがありましたっけ？」

私が思い出してその人の名前を呟いたのが聞こえてしまったらしく、桃子さんが尋ねてきた。

（うわわ！！どうしよう零！？）

（まったく……だから言ったろ、気をつけろって）

念話でそんなやりとりをすると零が桃子さんに話しかけた。

「いや～有名ですよ！とっても美人で、その人が作るお菓子は美味しいって！」「あら！ありがとう、小さい子でも美人なんてお世辞を言われたら嬉しいわ」

「お世辞なんて！そんなことないですよ。いや～桃子さんが作ったお菓子を食べてみたいな～」

「それじゃあこのチーズケーキはどうかしら？今日のオススメなのだけれど」

「じゃあそれもお願いします！」

零が軽い昼食と桃子さんオススメのチーズケーキを二人分頼むと、桃子さんはカウンターに戻っていった。

『……危なかった～！！……ありがとう零！』

「あぁ、今度からは気をつけてくれよ？……それにしても本当に桃子さん綺麗だったなぁ……って痛い痛い！地味に下で足踏まないでくれイリス！」

ふんっ！せっかく感謝してたのに零は一言余分なんだから！

ご飯を食べ終わった後、チーズケーキがきたので食べてみると……

『っ！！！すごく美味しいぃ～！！！甘さが絶妙に控えてあってさ

っぱりしてる！』
「本当だ！こんなに美味しいなんて……」
あまりにも美味しかったので零に頼んでお土産にシュークリームやケーキをたくさん買ってもらった。

『さて！じゃあそろそろ帰ろっか！』
翠屋を出て街をぶらぶらしたのでそろそろ家に帰ろうと零に声をかけると、突然道路から巨大な木の根が飛び出してきた。いきなりだったので体が硬直してしまい、その時に砕けたコンクリートの破片が私に向かってとんできた。これは避けられないと思っていると私の前に零が立ち塞がって、零の体に破片が刺さるのが見えた。
「ぐぁっ！……大丈夫かイリス？」
『零っ！！！そっちこそ大丈夫なの！？待ってて今すぐに回復させるから！』
私を庇って破片を受けた零の背中にはいくつもの破片が刺さっていた。私はすぐに神力という力を使って、零を治療し始めた。
「ははっ……とっさだったからカッコ悪くなったな……お土産も駄目にしちゃったし……」
『そんなのどうでもいいよ！！！なんでこんなことしたの！？私は女神だから人間界の物理的痛みはないから大丈夫だったのに！』
「そうだったんだ……それは知らなかったな……でも、もし知ってたとしても多分同じことをしてたと思うよ」
『……どうして？』

治療が終わって立ち上がった零に聞いてみると、

「………だって俺はイリスのパートナーだろ？　パートナーを助けるのは当たり前だ！」

私はその言葉を聞いて泣きそうになってしまった。

「さてと、これもジュエルシードのせいだろうけど………封印の方はなのはに任せて、こっちは封印後の街の修復でもしますか！……手伝ってくれるかイリス？」

そう尋ねてくる零に私は泣きそうなのをこらえて言った。

『もちろんだよ！！　だって私は零のパートナーだもん！』

■■■■■■■■■■■■

………そんなこともあって私は少しずつ人間に興味がでてきました。

今なら何故お師匠様が私に人間を学ばせようとしているのかがわかってきた気がします。

それではお師匠様、また何度か連絡をさせてもらいます。

追伸　もしかしたら私は零に…………

「………お～いイリス！　ちょっと出かけてくるよ！」

部屋の外から零の声が聞こえてきた。またジュエルシードを集めに行くみたいだ。私は急いで準備をして部屋を出ようとした。

『ととっ！忘れるところだった！』

机の上に置いてある、シンプルで十字架が付いている銀のネックレスを首にかけた。これはデパートで零が私に内緒で買って事件後に渡してくれたものだ。

『待って待って！忘れてるかもしれないけど、修業で零と一緒に行動して人間を学ばないといけないんだから！』

そう言って私は大切なパートナーのもとに向かった……

番外編　イリスの報告書（後書き）

作者〔昨日のこの小説の情報を見たらお気に入りにして下さってる読者様が十人を越えてたのを見た瞬間、感激した！〕

零［こんな駄目作者が書いている作品をよんでいただき読者様には感謝感激です！］

作者〔もしこの作品を読んでの感想や質問、要望などがありましたらぜひ！くださいませ！〕

零［それで今回は番外編だったがなんで五話の後にやらなかったんだ？］

作者〔……実はどこにいれようか考えてたら先に六話を書いちゃったから……〕

零［番外編にしてごまかしたと……読者様に謝れ！全力で！］

作者〔すみませんでした！！！！！（土下座）〕

零［まったく……それで！次こそは温泉に行くのか？］

作者〔だね……高町ファミリーとかアリサやすずかとついにエンカウントすることになる！〕

零［俺には一つ！必ず阻止しなければならないことがある！！］

作者〔ああ……あいつを止めるのか……頑張って～……それ

では皆様、次話をお楽しみ下さい！」

零「絶対見させてたまるか！！！」

第七話　混浴ってもはや都市伝説だよね（前書き）

今回は１話では話が終わりませんでした……

第七話　混浴ってもはや都市伝説だよね

さて、日本国内は全国的に連休である。そして俺とイリスは今、チラシにあった旅館山の宿という温泉に二泊ほどするために来ていた。

「うわ～！私温泉って初めてだよ！」

『今からそんなにはしゃいでると、後から体力もたないぞ～』

着いて早々、あっちこっちを走って見て回るイリスに声をかけて、少し落ち着かせた。しかし、ここってあの温泉だよな……となるとここにはあの面子も来るんだろうなぁ……

「…ぃ……零ってば！聞いてるの？」

『…っと、悪い悪い。どうしたイリス？』

「さっきからなんか難しい顔してたから……最近いっつもそんな顔してるよ零……何か考え事？」

どうやら最近考えてばっかりでそれが顔に出てしまっていたのか、イリスに心配をかけてしまっていたようだ。

『まぁ…ね……でも大丈夫！心配してくれてありがとうイリス！……それじゃあそろそろ予約した部屋に行くか』

俺がイリスに大丈夫だと笑顔で言うと、少し安心したのかイリスも嬉しそうに笑った。

まぁ、夜までは時間があるしその間はゆっくりと休むかな……

旅館の人に案内されて部屋に着くと、イリスがさっき受付で渡された浴衣に着替えたいと言ってきたので、案内してくれた人に着付け

を任せて俺は荷物を置いて部屋の外で待っていた。

『そういえば温泉なんて久しぶりだな……前は行く機会が全くなかったし……』

大学生が一人で温泉行っても楽しくないでしょ……えっ？一緒に行く友達とか彼女はいなかったのかって？……察してやって下さい……

「あ～～～～～！！！！！！！」

俺が前の世界での自分を思い出して落ち込んでいると、いきなり女の子の驚く声が聞こえた。

『……一体なんだ？……って、なのは！？』

声がした方を見ると高町家の皆さんと、アリサやすずか達が温泉に入りにいく途中だったのか勢揃いだった。

「どうしたのなのは？……コイツと知り合い？」

なのはがいきなり大声をだして俺を指差したので気になったのか、アリサが怪訝な顔をしてなのはに聞いた。

「えっ！？う～んと……その……」

なのはが、みんなにどう説明したらいいのかわからず困っていた。

まぁ魔法関連のことは言えないもんな……

『それは……実はこの前、事故に遭いそうなところを助けてそれ

で知り合ってたんだよ……なっ！なのは？』
（上手く適当に話をあわせてくれ）
（えっ！あっ……うん、わかった！）
「そっ、そうなんだよ～……それでお礼とかしっかり言えずにいなくなっちゃったから、会えてびっくりしちゃったんだ！」
（後で詳しいお話…聞かせてね）　（……わかった）　「ふ～ん……そうだったんだ……」

なんとかごまかせたのか、アリサが納得していると今度は士郎さんが声をかけてきた。

「いや～事情はわからないがなのはを助けてくれてありがとう。え～と名前は……」
『零……神童　零です』
「そうか、それじゃあ神童くん！なのはを助けてくれたお礼を私からも言わせてもらうよ」

士郎さんにお礼を言われて少し戸惑っていると、

「お待たせ～零！どうかな？浴衣似合ってる？」

イリスが着替え終わったのか浴衣姿で部屋から出てきた。あぁ……
……またややこしくなりそうだ……説明……めんどくさくなってきたな……

その後、改めて俺とイリスは自己紹介をした。もちろん家族かどうか聞かれたが説明がめんどいので、複雑な家庭なんですと言ったら

みんなイリスの容姿を見てなんか納得していた。
そして……温泉についた時に事件は起きた……

『さて、じゃあまた後でな。先に出てたら外で待ってるわ』

この後に旅館を回る約束をなのは達としたのでそう言って男湯のほうに入っていこうとすると……

「え？零もこっちで一緒に入らないの？」

……ハイ？ナニヲイッテルンデスカイリスサン？

突然そんなことを言い出したので頭が数十秒フリーズしてしまった。

『……っは！？いやいや！何言ってんだよ！そんなの無理に決まってるだろ！！混浴じゃあるまいし！』

「え～～でも十歳未満は大丈夫ですって書いてあるよ？」

確かにそんな注意書きがあった……

『それでも！！なのは達だって男の俺がいたら嫌だろ？』

イリスに言っても引き下がらないとわかったので、なのは達に聞いた。よしっ！これでなんとかなっt

「私は別に大丈夫だよ！体はタオルで隠せばいいし」

……えぇ～……なのは……いくら9歳だからといっても、それは抵抗がなさすぎだよ……

「なのはがそう言うんだったら……べつに私もいいわよ」
「私も大丈夫だよ～」
アリサとすずかまで……アレ？これ、もしかして強制イベントですか？
「これで決まりだね！じゃあ早く温泉に入ろう！」
『ちょっ！……待てって！待って！待って下さい！！……仕方ない！ならお前も道連れだ！』
俺はイリスに引きずられながら、男湯のほうに逃げようとしてるユーノを捕獲した。
（なっ！なんで僕まで！？）
（しょうがないだろ！男一人で女湯に入る度胸が俺にあるかっ！！）
念話でそんなことをユーノと話しながら女湯の中に入っていった……
……
中に入ってからなのは達が着替えだしたので、俺はユーノと一緒に体を逆向きにして着替えが終わるのを待っていた。
大丈夫、俺は実質１８だ……理性もしっかりある……落ち着くんだ…素数を数えて落ち着くんだ…素数は１と自分の数でしか割ることのできない孤独な数字…俺に勇気を与えてくれる……

「零～みんな着替え終わったから先に入ってるよ～」
隅っこで素数をかぞえながら無我の境地にはいりそうなところでイリスの声で意識が戻ってきた。
『……じゃあ俺たちもはいるか……』
（そうだね……）
意を決して腰にタオルを巻いて中に入ると……そこは天国だった……
「遅かったね……どうしたの鼻おさえて？しかも入る前からのぼせたみたいになってるよ？」
イリス、しょうがないんだよ。今まで女の子との関係などなく一人寂しくしてた俺にとって、こんな美少女たちがタオル一枚の姿でいるところを見ただけで鼻血ゲージがほぼＭＡＸになっている。
『いや大丈夫、大丈夫……それにしても……』
これはなんというか…自分はこれでも１８歳なのでどうしても自分が犯罪を犯しているような気持ちになってしまう。
なのは、アリサ、すずかはまだ９歳なのでなんとか大丈夫だが……
…なんとか！！大丈夫だが！！美由希さんや忍さん、桃子さんはスタイルがいいのでタオルを巻いていても体のラインがわかってしまう……ちなみにノエルさんとファリンさんは後から入るらしくいない……イリスは……女神ってこれから成長するのかな……
「零……今かなり失礼なこと考えてなかった？」
『いえ！そんなことないですよ！？』

考えていたので、つい敬語で返事をしてしまった。
そんなやりとりをしていると、なのはとすずかが自分の姉の背中を流していた。アリサはユーノを洗っている……ユーノには後でこぴんでもくらわせよう。

そんな様子を見ていて嫌な予感がしたので、すぐさま湯に入ろうとするが案の定

「零！私が背中流してあげるよ！」

やっぱりな～……

『いや大丈夫、自分で洗うからいいよ』
「だ～め！背中のほうが自分だとしっかり洗えないでしょ！」
『大丈夫だってば！』
「だめだって！」

俺が恥ずかしいので断っていると、イリスがどうしても背中を流したいのか……いつのまにか軽い取っ組み合いまでに発展していた。

『ぐぐぐっ！！』
「ぬぬぬっ！！」

なんでこんなことになってるんだっけかなとか考えてたら、集中が途切れたのか手元がくるってしまった。
やばいっ！と思った瞬間にはもう遅かった。俺の手はイリスの巻いてあるタオルに手がかかってしまい……

「……えっ？」

気づいた時には俺の目の前には生まれたままの姿のイリスがいた。

「〜〜〜〜〜〜／／／／／／／／！！！？！！？！」

イリスが驚き５％、恥ずかしさ９５％の状態で悲鳴もあげられないでいるのに対して、俺はついにゲージが限界を越えた。

『ぐはぁっ！！！！！』

零はおもいっきり倒れて、そこは鼻血で赤く染まり、まるで赤い一輪の花が咲いたようだった。

薄れゆく意識の中で俺は思った……イリス……さっきは失礼なこと考えてゴメン……今なら俺、言えるよ……流石は女神だと……

第七話　混浴ってもはや都市伝説だよね（後書き）

零［……おい……俺はユーノが女湯でなのはたちと一緒に入るのをぶち壊そうと思ったのにこれはなんだ？］

作者〔……テヘッ☆〕

零［ぶち殺す！！！！！！！！！］

作者〔おわっ！！いきなりレグルスを起動させて襲い掛かってくるな！！なんだよ！感謝はされても文句を言われるようなことにはなってないぞ！］

零［ぐっ！それを言われると……］

作者〔ほらな！内心かなり嬉しかったんだろ？ほら、素直になれって〕

零［あぁ！もうわかったわかった！この話はこれで終わり！ほらっ、読者様に感謝！］

作者〔逃げたな……まぁ　いいや！変わらずこの作品を読んで下さっている皆様には感謝感激です！……この話が終わると一期も後半に入っていきます。シリアスな話や戦闘描写など、作者の駄目加減がさらに出てくると思います…〕

零［ようやく俺も徐々に力を使えるってことか！］

作者〔まぁ…基本、一期は戦闘が少ないから……後半からはバン

バン力使わせていきたいと考えてるよ」

零「そうか……それでは皆様、また次話で！」

第八話　酒は飲んでも飲まれない！（前書き）

久しぶりの投稿です！

第八話　酒は飲んでも飲まれない！

『あ〜……まだちょっと鼻がむずむずする……』
「零くん大丈夫？」
「まったく！あんたのせいで無駄な時間使っちゃったじゃない！」
「アリサちゃん、そんなこと言っちゃだめだよ〜」
風呂から俺達子供陣は先に上がって、今は旅館を探検中だ。イリスはあんなことがあったので、桃子さん達と一緒にまだ入っている。
『悪かった悪かった！せっかく浴衣を着て可愛いんだから、そんなに怒るなってアリサ……』
ちなみに、先ほどアリサとすずかから名前で呼ぶ様にと言われたので、名前で呼ぶことにした。
「なっ！？………べっ、別に怒ってなんかないわよ――――////////」
そう言いながら顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。………ツンデレキタ〜！実際に見ると破壊力高いな〜………
そう思ってなのはとすずかの方を見ると二人とも何か聞きたそうな顔をしていた。これは……あれかな……
『もちろん！なのはとすずかの浴衣姿も可愛いよ』
俺が笑顔で言うと、二人も顔を赤くしてしまった。……やっぱり二人とも俺に聞きたかったのか……えっ？フラグがどうしたって？

むしろどんと来いですよ！

そんな会話をしながら歩いていると正面からオレンジ色の髪の女性が話しかけてきた。

「はぁ～い！おちびちゃん達……ふんふん、君かね～うちのコをあれしてくれちゃってるのは……」

「えっ？……えっ？」

急に話してきたかと思えばなのはにちょっかいを出してきた。

……やっぱり出てきたかアルフ……別に嫌いじゃないんだけど、なのはが困ってるしそろそろ止めとくか……

『なのは、知り合いなのか？』

俺がなのはとアルフの間に割って入るようにしてなのはに聞くと、なのはは首を横に振った。

『だそうだから……人違いじゃないですか？』

（もういいだろ？用が済んだならフェイトのところに戻れアルフ）

「……！……あぁそうだったみたいだ！知ってるコによく似てたみたいだからさぁ」

（……そうかい。あんたがフェイトが言ってたもう一人のやつだね……あんた！なんでフェイトや私のことを知ってるんだい？）

『それならもういいですよね？じゃあみんな行こうか！』

（それは言えない……どうせ近い内にまた会うだろ……それじゃあ）

一方的に念話を切ってから、俺は三人を連れてその場を離れた。

その後、卓球をしたりお土産を見て回ったりして結構時間がたったので今日は部屋に戻ることになった。
なのは達と別れて自分の部屋に入ると、中にイリスがいなかった。
『あれ？まだ戻ってないのか……やっぱり昼のこと怒ってるのかな……』
多分なのは達の部屋にいるだろ……なのはの魔力の反応を探してっと。おっ！いたいた！
部屋がわからなかったが、なのはの魔力を探して見つけた。てかかなり近かったので、すぐに部屋に着いて声をかけて中に入った。
『すいませ～ん、神童ですけどイリスがこの部屋にいませんか……』
「あ～！！！れいれいれいれいれい～～～～！」
『おわっ！？いきなり抱き着いてくるな！！というよりイリス酔っ払ってるだろ！一体なんでこんなことになってるんですか！？』
俺から抱き着いて離れないイリスに困りながら聞くと士郎さんが説明してくれた。
「いや～風呂から出た後にみんなで飲もうという話になってね……その時にイリスさんがお酒を飲んだことがないと言ったので試しに一杯誘ってみたら」
『こうなったって訳ですか……イリス大丈夫か？とりあえず部屋に戻ろうぜ』「ん～……あるけないかられいがつれてってぇ……」
『……仕方ないな……よいしょっと！じゃあ皆さんお騒がせしました……お休みなさい』

俺はイリスを背負って部屋から出た。部屋に戻る途中イリスには昼のことを謝った。

『イリス……風呂の時はごめんな……やっぱり怒ってるだろ？』

「……ん～ん～おこってないよぉ……でもね……はじめておとこのこにみられたんだから……だから……」

『……イリス？……なんだ寝たのか……にしても嫌われたわけじゃなくてよかったよ……』

部屋に戻ってイリスを布団に寝かせて、俺は今日発動するジュエルシードの反応を待った……

『おっ！発動したってことはなのはとユーノも向かったな。イリスは……起こすと悪いし一人で行くかな。どうせ今回は観戦だから……レグルス、バリアジャケットだけ頼むよ』

「Ｓｉｒ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

俺は赤い外装になってなのは達のもとに向かった。

なのは達に追いつくと、ちょうどアルフがなのはに飛び掛かっているところだった。

『毎度かなりいいタイミングだなっと！』

俺はなのはの前に出てシールドを張ってアルフをくいとめた。

「あんたは！？ちぃ！……こんなものぉ！！！」
『ユーノ！今のうちに強制転移魔法！こいつを足止めしといてくれ！』
「わかった！なんとかやってみるよ」
俺がアルフを止めている間にユーノが転移魔法を発動させて、緑色の光を残してアルフとユーノの姿がいなくなっていた。
『これでよしっと……さっきぶりだね、なのは』
「零くん！今のは……ユーノ君はどこに？」
『あぁ、それならここら付近のどこかに転移しただけだから心配ないよ』
俺はなのはに説明して、フェイトの方を見た。
『久しぶりかな……さてどうする？ここは平和的に話し合いでもしてみるか？』
「……話し合うだけじゃ……言葉だけじゃきっとなにも変わらない……伝わらない！だから賭けて、それぞれのジュエルシードを一つずつ」
バルディッシュを構えてフェイトがそう言ってきた。
『そうか……ならしょうがない。俺がい「待って！」……なのは……』
「零くんお願い！私に行かせて！……あの子のこと……私もっと知りたいから！」
『……わかった、じゃあ俺は見させてもらうよ。後、もしなのはが負けたらジュエルシードは俺のをフェイトに渡すから』
「えっ！？いいの？零くんもジュエルシード集めてるんじゃ……」

『あぁ別にいいって。欲しくて集めてる訳じゃないし……頑張ってなのは！』

そう言い残して俺は空に飛んで、上から観戦することにした。

しばらくして、なのはとフェイトの戦闘が始まった。

フェイトがなのはの背後に回り込んでバルディッシュを横なぎに振るが、なのははそれをしゃがんでかわして二撃目も空に飛んでかわした。

お～！なのはは、大分闘いかたが様になってきてるな。おっ！撃ち合うつもりだな……フェイトはサンダースマッシャーで、なのはがディバインバスターか……うおっ！？凄い魔力だな！ぶつかり合った衝撃がここまでくるとか……

「レイジングハート！お願い！」

「Ａｌｌｒｉｇｈｔ」

……ここにきてまだ魔力が上がるか……強い……が！甘いな……あれで決まったと思って上にいるフェイトに気づいてない……これは決まった。

『はい！そこまで！……この勝負はなのはの負けだな……』

俺はなのはの首にバルディッシュが突き付けられる前に左手でバルディッシュの魔力刃の部分を掴んでいた。手からは少しだが血が垂れている。

『じゃあこれが約束のジュエルシード』

レグルスからジュエルシードを出してフェイトに渡した。これで俺はジュエルシードが全てなくなった。

「零くん！！それはっ！？……」

『いいんだよ！これは観戦料なんだから』

「やっぱり……今のを素手でなんて……あなたは……」

そう言いながら下に下りていくフェイトに続いて、俺となのはは地上に戻った。

近くにいたアルフを連れて帰ろとしていると、なのはが呼び止めた。

「待って！！」

「……できるなら、私達の前にもう現れないで……もし次があったら、今度は止められないかもしれない……」

「名前！あなたの名前は？」

「フェイト……フェイトテスタロッサ……」

「あの…私は！」

なのはが自分の名前を言い終わる前に、フェイトとアルフはいなくなってしまった。

『なのは……』

「零くん……ごめんね。私が負けちゃったから零くんのジュエルシードが……それにその手……」

明らかに落ち込んでるのがわかったので俺は左手を見せないようになのはに言った。

『大丈夫だよ！ジュエルシードだってもともとそんなに必要な物じ

ゃないし……ここは寒いし旅館に帰ろう。今日はもうゆっくり休んだほうがいい』

そうしてなのはに右手をさし出すと

「うん……ありがとう……」

そっと手を繋いで俺となのはは旅館に帰った。

こうして俺達の旅行は終わった……

第八話　酒は飲んでも飲まれない！（後書き）

作者〔皆様お久しぶりです！今回は久しぶりの投稿になりました〕

零［ったく！こんな作品でも読んで下さっている読者様がいるんだからしっかりしろよな！］

作者〔本当に申し訳ありませんでした！〕

零［それで？次話からは大丈夫なんだろうな？］

作者〔それはなんとか……というより今日はもう限界です……〕

零［そういえば明日は５時３０分には出るのか……寝れないな……］

作者〔だがしかし！明日さえ乗り越えれば楽園が私を待っている！！！〕

零［はいはい……この作品を読んで下さっている皆様には感謝感激です！］

作者〔それではまた……次話で……ｚｚｚ〕

第九話　二兎を追って二兎を得る（前書き）

今回は大変でした。一度完成したにもかかわらず、保存できなくもう一度始めからやり直すという試練が……なんとか書き直せて眠さが限界です……

それではどうぞ読んでやって下さい！

第九話　二兎を追って二兎を得る

温泉から数日後

あれからジュエルシードの発動はなく、今日も外に探しに行こうとするとイリスに呼び止められた。

「あっ！零、今日はレグルスを私に預けてくれないかな？」
『ん？別にいいけど…なんでまた？』
「う～ん……今の零の強さなら大丈夫だとは思うんだけど……一応、あるプログラムを組み込んどこうかなって思って」
『ふ～ん……あるプログラムっていうのは？』
「それは秘密ってことで……駄目かな？」
『そっか…なら預けとくよ。じゃあ、イリスは今日はずっと家にいるのか？』
「うん……丸一日はかかると思うから」
『なら、なんか帰りに買い物してくるけど欲しい物ある？』
「甘いもの！翠屋のケーキが食べたい♪」
『オッケー！じゃあ行ってくるよ』

家を出てから時間が過ぎ、いつの間にか辺りが夕日で赤く染まっていた。
歩いて探し回っていたので少し休もうとして、近くの公園に行くと

ベンチになのはが一人で座っていた。
なのはを見ると落ち込んでるのがすぐにわかった。
『よいしょっと』
「あ……すみません……って零くん！？」
隣に座ったのが俺だとわかるとなのはは驚いていた。
『よっ！どうしたんだ？こんなところに一人で…アリサとすずかは？」
『あ……うん。ちょっと寄り道……アリサちゃんとすずかちゃんは夜遅くまでお稽古があるから今日はなのは一人なの……」
アリサとすずかの名前を出すと明らかに何かあった反応をしたので聞いてみた。
『……今日アリサとすずかとなんかあったんだろ？』
「……ううん。別に何もなかったよ」
『バーカ』
隠してるのがバレバレな嘘をついたので俺は少し強めのデコピンをしてやった。
「痛っ！？痛いよ零くん！なんでいきなり！？」
『わかりやすい嘘をつくからだ！……話してみろって……俺はなのはにそんな辛そうな顔をして欲しくないんだ……』
「零くん……」
そう言うとなのはは今日学校であったことを話してくれた。

『そっか……アリサとケンカしたのか』
「違うよ。私がボーッとしてたからアリサちゃんに怒られたってだけ」
『……フェイトの事を考えてたんだろ？』
「うん……だから二人には言えなくて」
『なるほどな……これは俺が言うべきことじゃないかもしれないけど、二人ともなのはが悩んで困ってることに気づいて心配してると思う。だけど、何に悩んでるか教えてもらえなくて何も出来ない自分にアリサは怒って、それをなのはに向けたんだろうな……だけどな、二人きっとなのはを信じていつか話してくれるのを待っててくれてると思う。だって二人は親友で本当になのはの事が大好きだから』
「……ありがとう零くん」

言い終わって自分が言った事に恥ずかしくなってなのはの頭を撫でてごまかした。なのはを見ると、恥ずかしがってる様な嬉しがってるような顔をしていた。

『さて！じゃあそろそろ俺は行こうかな。もともとジュエルシードを探してたとこだったし』
「もう行っちゃうの？……じゃあ！一緒に探さない？零くんに聞きたいことといっぱいあるんだ！」
『う～ん……俺もそうしたかったけど一つ用事ができたから』

なのはがとても残念そうにしていたが、俺はなのはの誘いを断ってある場所に向かった。

『え～と、夕飯はこんなもんでいいかな。翠屋でケーキも買ったし』

なのはと別れた後、俺は買い物をしてとある高層ビルの前に来ていた。

『……まぁ絶対に警戒されるだろうけど、多少無理矢理でも中に入れてもらわないとな……』

フェイト　Ｓｉｄｅ

「あ～！また食べてない……駄目だよ食べなきゃ……」

私がベットで横になっているとアルフが腰掛けてきた。

「少しだけど食べたよ……そろそろ行こうか。次のジュエルシードの大まかな位置特定は出来てるし……それに、あんまり母さんを待たせたくないし……」

ベットから起き上がって準備をしようとすると

ピンポーン

「……！？」

鳴るはずのないインターホンの音が聞こえた。私達がここに住んでいるのは誰も知らないはずだ。

「一体誰だい……フェイトここは様子を見よう……」

緊張した雰囲気の中、私は無言でアルフに頷いた。すると外から声が聞こえてきた。

『すいませ～ん！ピザ屋ですけど、注文された品物をお届けに来ました！』

「頼んだのアルフ？」

「そんな訳ないじゃないか！」

一応アルフに確認するとやっぱり違っていた。

しばらくインターホンの音が続いたので玄関のほうに行くとまた声が聞こえた。

『やっぱりこんな方法じゃ開けてもらえないか……しかたない、できればこの方法は使いたくなかったんだけどな……』

そんな声が聞こえると突然目の前に黒い光が溢れた。光が収まるとそこには、何度か会ったあの男の子がいた。

『お邪魔します』

フェイト　Ｓｉｄｅｏｕｔ

一応挨拶はしたけど、これって完璧に不法侵入だよな……そんなことを考えてると、いつの間にかフェイトはバルディッシュを構えて、アルフは狼の姿になっていた。

「あんたは！？……一体なにをしにきた……」

「……」

うわぁ……今にも襲い掛かってきそうな雰囲気だな……だけどこの場合、フェイト達は正当防衛になるのかな……っと、くだらないことを考えてないでなんとか話しが出来る状態にしないとな……

『待った待った！俺には戦う意思はないって！それに俺はフェイトと敵対する理由が無いんだよ』

「そんなこと信じられるか！！」

「待ってアルフ」

「フェイト……」

俺に飛び掛かろうとしたアルフを止めて、俺に聞いてきた。

「それなら貴方は一体何をしにきたんですか？」

『とりあえず俺の事を信じてもらうためにジュエルシードを集めるのを手伝おうかなって……結構無理してるようだし……』

フェイトを見ると疲労を無理矢理ごまかしているのがわかった。

「無理なんかしてません。それに貴方はあの白い子の仲間じゃないんですか？」『白い子？あぁ！なのはのことか。今のところは違うかな……俺は自分の目的のために行動しているから……』

確か今日発動するジュエルシードでかなり無茶をするんだよな……こんな体なのに……俺がなんとかしないと……

『それじゃあ少しでも信じてもらうためにっと…』

俺が魔力を解放すると二人が身構えた。

「あんた一体何をするきだい！？」

「それに……この魔力……やっぱり強い……」

う～ん……初めて使うけど上手くいくかな……

フェイトの足元に白い魔法陣を展開させ、自分の魔力をフェイトに流すイメージする。

「……これは！？」

『ふぅ……どうかな？これで大体回復させたと思うけど』

「凄い……！体力と魔力が完全に回復してる……」「本当かいフェイト！？……あんた一体何者なんだい？」

『まぁ俺の事は置いといて……どうかな…これで少しは信じてもらえた？』

「……私はこの人が嘘をついてるようには見えないけど……アルフはどう？」

「私はフェイトがそう言うなら……ただし！もしフェイトを裏切

るような事をしたらただじゃおかないからね！」
『あぁ、その時は煮るなり焼くなり好きなようにしていいよ。ありがとうフェイト！アルフ！』
俺が笑顔で言うと、お礼を言われるのになれていないのか顔を赤くして俯いてしまった。
……やっぱりフェイトは可愛すぎだろ！！！しかもマントしてないバリアジャケットの姿だからさらにダメージが……！！！
そんな危ない感じで見ているとフェイトが少しふらついているのがわかった。そういえばこの時あんまり飯を食ってなかったっけ。
『ところで二人とも、もう夕飯食べた？』
「あたしは食べたんだけどフェイトは……」
「大丈夫だよ……今はあんまり食べたくないんだ……」
アルフが心配した様子でフェイトを見ている。なるほど、この様子だと全然食べてないみたいだな……
『じゃあこれなら食べれるだろ！』
俺は買ってきた翠屋のケーキを出して二人に渡した。
「……！美味しい」
「これなら何個でも食べられるよ！」
さすが桃子さんが作ったケーキ。フェイトも食べてくれてるし、よかった……

あれ？なんか忘れてるような気が……まぁいいか！

「そろそろ行こうか」

そう言うとフェイトは手からマントを出して羽織った。俺はレグルスがないのでそのままの格好だ。

『ジュエルシードの位置は大体把握してるから転移魔法で行くか』

俺はジュエルシードの位置を確認して転移魔法を使った。

「母さん……待っててね……」

転移する瞬間、そうフェイトが呟いたのが聞こえた。

第九話　二兎を追って二兎を得る（後書き）

作者〔絶望という地獄から戻って来ました！！〕

零［というかなんであんなことになったんだ？］

作者〔わからん…いきなりページが閉じられた時はかなりショックで数分間意識がなくなったからな〕

零［まぁ書くのを辞めなかったのは褒めてやるよ］

作者〔ありがとう！さて、今回は零が二人に手を出してヘタレている話でした〕

零［ちょ！おま……言い方が悪すぎだろ！俺はただ二人ともなんとかしてやりたかっただけで……］

作者〔はいはい……それにしてもどうしても零の戦闘が少ないな〕

零［流すな！ったく……なんとかしろよな］

作者〔わかってるよ……それでは！この作品を読んで下さっている皆様には感謝感激です！〕

零［感想、質問、要望などありましたら是非ともこの駄目作者に言ってやって下さい！それでは次話でまた会いましょう］

作者〔あれ……体が思うように……動か……〕

第十話　強襲（前書き）

今回は戦闘シーンが……やっぱり難しいですね……かなり伝わりにくいかもしれませんが読んでやって下さい！

第十話　強襲

転移した先は街のビルの屋上だった。

「大体この辺りだと思うんだけど…大まかな位置しかわからないんだ」

「はぁ……確かにこれだけごみごみしてると探すのも一苦労だ～ねぇ」

「ちょっと乱暴だけど周辺に魔力流を撃ち込んで強制発動させるよ」

『ちょっと待った！それは俺がやるよ……どうせ結界も張らずにやろうとしたんだろ？』

「うっ……じゃあお願いします」

『任せとけ！……はぁぁぁぁ！！！！！』

ここら一帯に結界を張るのと同時に魔力を雷のようにそこら中に落とした。すると、すぐにジュエルシードが強制発動した。

「見つけた！」

『だけど向こうも近くにいるみたいだぞ』

そんなに遠くないところでなのはとユーノの魔力反応があった。

「早く片付けよう……バルディッシュ！」

「Ｓｅａｌｉｎｇｆｏｒｍ　ｓｅｔｕｐ」

なのは　Ｓｉｄｅ

（なのは！発動したジュエルシードが見える？）
（うん！ユーノくん、すぐ近くだよ）
（あの子達もすぐ近くにいるんだ……あの子達より先に封印して！）
（わかった！）

フェイトちゃんより先に封印するために遠距離からレイジングハートで狙い撃つと、同じタイミングで金色の魔力光が別方向から放たれた。

「リリカル！マジカル！」「ジュエルシード…シリアル１９」
「「封・印！！」」

「Ｄｅｖｉｃｅ　ｍｏｄｅ」

私は、ジュエルシードに近づきながら、昔アリサちゃんとケンカした時の事を思い出していた。

アリサちゃんやすずかちゃんとも初めて会った時は友達じゃなかった……話をできなかったから……わかりあえなかったから……
アリサちゃんを怒らせちゃったのも私が本当の気持ちを…思っている事を言えなかったから……

「やった！なのは早く確保を「そうはさせるかい！」

上から飛び掛かってきたアルフさんからユーノくんがシールドを張って守ってくれた。シールドが砕けると、目の前にはフェイトちゃ

んがいた。

目的があるどうしだから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない……だけど……知りたいんだ

「この間は自己紹介できなかったけど……私なのは！高町なのは…私立聖祥大附属小学校三年生…」

「Ｓｃｙｔｈｅ ｆｏｒｍ」

「……っ！」

どうして……そんなに淋しい目をしてるのか…

なのは　Ｓｉｄｅｏｕｔ

『おっ！始まった……後はフェイトが無茶をするのを止めればいいか』

なのはとフェイトの戦いが始まったのをビルから見ていると、不意に物凄い寒気がした。

『なっ……！！！』

「……」

後ろを振り向くといつからそこにいたのか、仮面をつけた子供がそ

こに立っていた。

こいつ……多分男だろうが、俺と同じ背丈で、バリアジャケットとデバイスもそっくりだ……違うとこは色と雰囲気くらいか……
……まるで機械みたいだ…
そいつのジャケットは真っ白で腕につけてる腕輪は金色だった。

「……ソードフォーム……タイプ２」
「Ａｇｒｅｅｄ　ｓｗｏｒｄｆｏｒｍ　ｔｙｐｅ２　ｓｅｔｕｐ」
戦闘形態になったのか、金色の腕輪は２ｍはある純白の大剣になった。

『おいおい……デバイスの戦闘形態も一緒なのか……』

相手が構えたのでこっちも警戒していると一瞬で姿が消えていた。

『ちっ！障壁展開！！』

俺が前にフェイトに使ったのと同じ縮地で死角に回り込まれ、気づいた時には大剣を振りかぶっていたので避けるのは間に合わないと判断した。横薙ぎに振られた大剣と防御障壁がぶつかり合った。

『くっ！……このままだと障壁が持たない……おらぁ！！！』

破られる直前に大剣を障壁で弾いて軌道をずらした。

『……冗談じゃない……こんなの喰らったら一たまりもないって……』

弾いた先にあった給水ポンプが真っ二つになっていた。
やばい……レグルスもないからこのままだと殺られる……一撃で決めるしかない！
俺は出来るだけ高く飛んでビルから離れた。幸いあいつは俺の出方を待っている。
『これで……決める！』
魔力変換する属性は闇。
辺りは暗い……これならさらに力も増すだろう。
闇の本質は【消滅】
『全てを飲み込め……ダークネススフィア！』
俺は凝縮された黒い魔力球をビルに向かって放った。魔力球は手の平ぐらいの大きさだったが、あいつに当たる寸前までいくとビルを飲み込むほど大きくなった。黒い球体が消えると、そこにあったはずのビルが無くなっていた。
『……これは自分で使っておいてなんだけど……やり過ぎか？』
まぁ対人には非殺傷設定になってるから大丈夫だろ……ビルも結界内だし……
完全に倒したと思いビルの屋上があったところを見ると、何事もなかったかの様にあいつはそこにいた。
『嘘だろ……ぐぁっ！！！！』

呆然としていると急に右腕に激痛がはしった。いつのまにいたのかわからず、気づいた時には蹴り飛ばされてた。

……マジかよ……あそこにいたのは幻か……今ので右腕折れたな……これはマジでやばい……

「……弱い……」

俺の折れた右腕を見て、そんな言葉を言いながらそいつはどこかに転移していなくなった。

『なっ！？……なんだよ……なんなんだよ一体あいつは！！！』

しばらくするとなのはとフェイトがいるほうで爆発が起こった。

『考えていてもしかたない……今はあれをなんとかしないと……』

あいつの事を考えるのを止めて俺はジュエルシードのところに急いだ。

『あれは！？』

着いて見えた光景はフェイトがジュエルシードに向かっているところだった。俺はすぐにフェイトの前に立ち塞がった。

『待った！フェイトが今やろうとしている事は無茶すぎる！今あれはほとんど暴走状態だ』

「……！それでも早く手に入れないと！」

『だからここは俺に任せてくれ』

「えっ！？……だけどその右腕……」

『大丈夫！あんなの片手で余裕だ！』

安心させるように明るく言って、ジュエルシードのところに行き左手で掴んだ。その瞬間、手から光が溢れた。

とは言ったもののこれは結構きついな～……あっ、今皮膚が少し破れた……だけど原作だとフェイトがこんな大変なことをやったんだよな……なんか腹立ってきたな……フェイトを傷つけやがって……いい加減収まりやがれ！！

俺がありったけの魔力を込めるとすぐにジュエルシードは収まった。

『……くっ……はいこれ……確かに渡したよ』

ふらふらしながらフェイトのところに行って手の中にあるジュエルシードを渡した。

「どうしてこんなになってまで……」

俺の左手を見て泣きそうな顔をして心配してくれた。

『そんな顔するなって……言ったろ大丈夫だって……それにフェイトが傷つく事に比べたら全然平気だよ』

「……ありがとうございます」

『それと！その敬語を止めてこれからはタメ口でいいよ』

「わかり……わかった」

そんな事を話してると人型になったアルフがこっちに向かってきた。

「フェイト！あんたも大丈夫かい？」

『あぁ大丈夫……それより二人ともここは一旦退いたほうがいい。あの二人は俺が引き受けるからその間に行け』

「……また会える？」

『もちろん！むしろまた俺から会いに行くさ』

「わかった……行こうアルフ」

「わかったよ……それじゃあ頼んだよ零！」

そう言って二人は街の奥に見えなくなっていった。ひそかに初めてアルフに名前で呼ばれたな……

「零くん……どうしてフェイトちゃんと……それにその傷……」

その場に残った俺になのはとユーノが近くまで来て聞いてきた。

「どうして彼女達にジュエルシードを渡してしまったんだ！何が目的かもわからないのに」
『……まぁ今回は俺が暴走を止めたって事で見逃してくれ。あの二人の目的は……本人から聞くしかないな…だろ、なのは？』
「……うん。私、フェイトちゃんからちゃんとお話し聞きたい！」
『そうか……頑張れよ……さて……そろそろ限界か……なのは、悪いけど今日はこれで……』
「零くん！？……いなくなっちゃった」

自分のマンションの部屋の前に転移した俺は家に入ってすぐに倒れた。

「お帰り～！遅いよ零、私お腹減っちゃって……って零！？どうしたの！！！零！大丈夫？零ってば！？」

イリスに大丈夫と言いたかったけど声が出なかった……明日もいろいろやらないといけないからな……それに今日襲ってきたあいつの事もあるし……明日イリスに聞いてみるか……
そう思ってそこで意識が途切れた……

フェイト　Ｓｉｄｅ

「フェイト大丈夫かい？あんな無茶しようとして」
「ありがとうアルフ。明日は母さんに報告に戻らないといけないから少しでも多く集めたかったんだ」
私はアルフを撫でながらそう言った。
「まぁ……明日は大丈夫さ…こんな短期間でロストロギア……ジュエルシードを四つもゲットしたんだし、褒められこそすれ叱られる様な事はまずないもんね！」
「うん……そうだね」
それにしても……あの男の子……ひどい怪我だったけど大丈夫かな……また会いたいな……
あれ？どうしてあの男の子の事を考えたんだろ……今まで母さんやアルフ以外の人の事を考えた事もなかったのに……
フェイトは戸惑いながらもその夜は寝るまで零の事を考えていた。

第十話　強襲（後書き）

作者〔やったぜ！！！初めての感想を頂いた！！！もう感想がきているのがわかった瞬間思わず顔がにやけたね！〕

零［他の人がいる電車の中でだからかなり怪しいやつに見られただろうな……］

作者〔そんなもの気にならないほどだったな！〕

零［わかった！わかったから少し落ち着けって！ほらっ！読者様に感謝しないと］

作者〔おっと、そうだった。これを読んで下さった皆様には感謝感激です。そして感想を下さった雨季様、ありがとうございます！これを励みにさらに頑張っていきたいと思います〕

作者〔あっ！そういえば今回負けてたね〕

零［ぐっ……人が気にしてたことを……最後に言いやがって……］

作者〔はっはっは！負け犬♪〕

零［うるせぇ！！！］

作者〔それでは皆様また次話もよろしくお願いします！〕

第十一話　人の心ほど難しく、わからないものはない（前書き）

シリアスな話は難しいです

第十一話　人の心ほど難しく、わからないものはない

……あれ？……体が動かせない……なんでだ？

自分の体に違和感を感じながら、少しずつ昨日の事を思い出した。

……あぁ、そういえば昨日は家に帰ってきてすぐにぶっ倒れたんだっけ……あれからどうなったんだろ……

だんだん意識がはっきりしてきたので起きようと目を開けると

「……ん……」

俺はイリスに抱き枕にされながら胸を顔に押し付けられている状態だった。

……うん……落ち着け……ここでパニックになったらそこでＧａｍｅ　ｏｖｅｒ……まずは今から起こす行動を考えるんだ。

？イリスを起こさない様にこの状態から抜け出す。

？イリスが起きるまでこのままの状態でいる。

？むしろこの状況をうまく利用して

……とりあえず？はこの世界での人生が終わる事になるから却下。

？は俺の理性が持ちそうにないのでこれまた却下。

やっぱ？しかないよな……まずは頭を押さえてる両手を外してっと……しかし今の状況を他人が見たら俺がイリスの寝込みを襲ってる様にしか見えないよな

……この時零は気づいてなかった。その他人にイリスが含まれていることを

「ん……零？」

『あっ…悪い起こしたか』「……何をしてるの？」『えっ？俺はただ……あ』

イリス視点→起きると俺が両手を握っている→顔は至近距離で俺が覆いかぶさってるような体勢→人生終了のお知らせ？

『違っ！違うんだイリス！これはただ単に起きようとしただけで……』

「零の……エッチバカヘンタイ唐変木！！！！」

『ちょっ！まっ……ぶっ！！！』

奇麗なアッパーでもう一度眠りにつかされ……一時間後に目が覚め、イリスの誤解を解いた。

「あはは……ごめんね！」『全く……昨日も大変だったのに今日も朝っぱらからハードだな……』
「そう！そういえば昨日はなんであんなにボロボロで帰ってきたの？私すっごく心配したんだから！」
『そっか……ありがとう……実は……』

俺は昨日あったことをイリスに話した。ちなみに、昨日の傷はイリスが治してくれたらしい……

「そんなことが……それに、零がやられたその仮面の子……デバイスも力も同じなんて……そんなことが出来るとしたら……」
『アイツのことで何か知ってるのか！？』
「……ごめん……まだわからない……けど、私もその子の情報を集めてみるよ」
『……頼むよ』

話が一段落するとイリスが机に置いてあるレグルスを渡してきた。見た目は特に変わっていなかったので普通に右腕にはめた。

『結局レグルスに組み込んだプログラムって何なんだ？』
「……対緊急用発動型プログラム……これは零が本当に危険な時に発動する様になってるんだ。だけど勘違いしちゃ駄目だよ！零自身が危ない時じゃないと発動しないから……でも零なら命にかかわる危険なんてそうそうないと思うからいらないと思うけど一応ね……」
『……了解。これからかなり無理させると思うけど頼むよレグルス』
「Ｎｏｐｒｏｂｌｅｍ」

時間を見るとまだ起きるには早い６時だった。

『そろそろ出かける準備をするか』

「へ？こんな朝早くにどこか行くの？」

『まぁ……ちょっとプレシアに会いに』

俺がプレシアの名前を出すとイリスの表情が険しくなった。

「プレシアって確かフェイトっていう子のお母さんだよね？……私あの人嫌い！自分の娘にあんな酷い事して！」

『だからその酷い事をさせないために今から会いに行くんだ』

あの人が自分の娘……アリシアのためにジュエルシードを集めてる事は別に悪い事だとは言わない……だけど、フェイトをただの人形としか見てないのは絶対に許せない！！！

「……じゃあ私も一緒に行く！今の零、一緒にいないと何するかわからないほど恐い顔してるよ」

いつの間にか自分でも気づかず怒っていたらしい……強く握り締めていた右手にイリスが優しく手を添えてくれたのでなんとか落ち着いてきた。

『サンキュー……じゃあ行くか相棒！』

「うん！転移は私に任せて！」

俺とイリスは意気込んでプレシアがいる場所……時の庭園へ転移した……

「とうちゃ～く！着いたよ零！」
『……』
「零？どうかしたの？」

……忘れてた……この世界に来る時も、イリスが転移魔法使ってヤバいところに着いたんだった……

『イリス……今度からは俺が転移魔法使うから』
「えっ！？ちゃんと目的地についたのになんで？」

そう……時の庭園にはしっかりと着いた……ただ、後ろからプレシアに俺が杖さえ突き付けられてなければな～……

「……それで？いきなり現れた貴方達は一体何者かしら？」

俺はゆっくりプレシアの方に振り向きながら少し下がって距離をとった。

『え～と……何者かっていうと、俺がフェイトの知り合いで』
「私は女神！！」
「そう……真面目に答える気がないなら消えなさい」

質問に答えるとプレシアが魔法を俺達に向けて放ってきた。

え～……二人ともしっかり答えたのに、やっぱイリスが女神って言ったのがふざけてると思われたのかね……

当たる直前に白い円形のシールドが張られてプレシアの魔法を防いだ。

「ちょっと！いきなり何するんですか！！」

「なっ！？今のを防ぐなんて……」

『今のイリスが？……もしかして、イリスってかなり強い？』

「まぁ、まがりなりにも神様ですから！天界でお師匠様に鍛えられてるから今はまだ零より強いかな」

『……』

これからなるべくイリスを怒らせない様にしようと強く思った瞬間だった。

「くっ！ならこれで……！……ごほっ！」

突然プレシアは口に手をあてて苦しそうに咳き込んだ。見ると少しだが吐血をしている。

（零！これって）

（あぁ……前に少し言ったと思うけどプレシアは死に至る病を患ってるんだ……だから魔法を使うってことは、自分の寿命を減らしてるようなもんなんだよ）

俺はプレシアに話を聞いてもらうために、来る前に着たバリアジャケットを解除してプレシアに声をかけた。

『今日は貴方と貴方の娘について話をしにきた』

「……それは私にフェイトを使ってジュエルシードを集めさせているのを止めさせろってことかしら？……もしそうなら、ここでこの話は終わりよ」
『いや……ジュエルシードを集めるのは別にいい。俺が話したいのはあそこにいるもう一人の貴方の娘についてだ』
俺はアリシアの遺体が保存されている部屋を指差した。

「なぜアリシアの事を！？」
『貴方はアリシアを蘇させるため、忘れられし都〈アルハザード〉に向かうためにジュエルシードを集めてる……違いますか？』
「零アルハザードって？」『……遥か昔に存在したといわれている世界で、そこには時を操り、死者さえも蘇させる秘術があるといわれている』
「……そうよ。私はアリシアを蘇えらせて失った時間を取り戻すのよ！」『フェイトは？貴方にはフェイトっていう娘がいるじゃないか』
「……あれはただの人形。せっかくアリシアの記憶を使って作ったのにそっくりなのは見た目だけ……失敗作よ」
「貴方は！！！！！どうしてそんな酷い事が『イリス！！』……零？」

やっぱり……もしかしたらと思ったけど……

『今言った事は嘘ですよね？』
「えっ！？」
「何を言ってるのかしら…私があの人形の事を娘だと思っているとでも？……ありえないわ」
『ならなんでフェイトの事を酷くいう度にそんな悲しい眼をするんですか？』

「……！！！」
『本当はフェイトの事も、娘だと貴方は思っているはずだ！！！』
その言葉でその場にいる全員が黙ったままになった。

しばらくすると、プレシアが全てを吐き出すように話し始めた。
「……最初は本当にただの人形としか見てなかった。アリシアとは性格も違ったから、失敗作だと思って虐げたりもした。だけどあの子はそれでも私が言ったことは全てやって、私に愛されようとした。そんな姿を見ていて私はフェイトの事を……だけどその時にはもう私の体は病に侵されていた。もうあまり時間がないこともわかってた……」
『……だから異常なほどにフェイトを虐げて自分から離れさせようとした……たとえジュエルシードを使ってもアルハザードに絶対にいける保証がないから巻き込みたくなかったって訳か……』

……やっぱりこの人も被害者なんだよな。アリシアを失ってしまったのも当時所属していた上層部の命令のせいだし。
「確かフェイトの知り合いと言っていたわね……名前は？」
『神童　零です。こっちが相棒のイリス』
「どうもです……」
ついさっきまでプレシアさんの事を誤解していたので気まずそうにイリスは頭を下げた。まぁ俺もそうなんだけど……

「それじゃあ二人とも。このことはフェイトには絶対に言わないと約束して」
「えっ！？でもそれじゃあ『わかりました。帰ろうかイリス』待ってよ零！本当にいいの！？」
『これだけ聞ければ十分だよ……最後に確認してもいいですか？』
俺はプレシアさんにこれだけは自分の口から言うのを聞きたくて尋ねた。
「何かしら？」
『プレシアさんは……フェイトを娘だと思っていますか？』
「……ええ、フェイトは私のもう一人の娘よ」『そうですか……それじゃあ失礼します』
それを聞いて、俺とイリスは家に転移で帰った。
この時、報告をするために戻ってきたフェイトが転移する俺達を目撃していた事に気がつかなかった。

第十一話　人の心ほど難しく、わからないものはない（後書き）

作者〔皆様お久しぶりです〕

零〔今回の話から徐々に原作ブレイクし始めたな〕

作者〔まぁね、書きたい事を書いてしまう！それが私ですよ！〕

零〔そんなだから書くのが上手くならないんだよ〕

作者〔ぐっ！！！痛いところを……〕

零〔で、次はどうするとか考えてるのか？〕

作者〔うん……まぁぼちぼち考えてるよ？……〕

零〔うわ！うさんくせ～……こんな駄目作者は放っておいて……この作品を読んで下さった皆様に感謝感激です！〕

作者〔それでは次話もお楽しみ下さい！！〕

第十二話　Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩって万国共通だよね♪（前編）（前書き）

眠いです。

第十二話　Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩって万国共通だよね♪（前編）

フェイト　Ｓｉｄｅ

「お土産はこれでよしっと」

今日は母さんに報告に行くのでお土産にケーキを持っていくことにした。前にあの男の子が買ってきてくれたのが凄く美味しかったから。

「甘いお菓子か…こんなもの、あの人は喜ぶのかねぇ？」

「わかんないけど…こういうのは気持ちだから」

「ふ～ん……」

「……次元転移、次元座標…８７６Ｃ・４４１９・３３１２・Ｄ６９９・３５８３・Ａ１４８３・７７９・Ｆ３１２５……開け誘いの扉。時の庭園テスタロッサの主のもとへ」

フェイト　Ｓｉｄｅｏｕｔ

Ｏｔｈｅｒｓ　Ｓｉｄｅ

同日　同時刻　次元空間内

時空管理局　次元空間航行艦船　《アースラ》

「皆どぉ？今回の旅は順調？」
「はい…前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが…二組の捜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね……もう二組に関してはまだわかりません」
「ふぅ……そう」
「失礼します、リンディ艦長」
「ありがとねエイミィ……そうね、小規模とはいえ次元震の発生はちょっと厄介だものね。危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと……ねっ！クロノ」
「大丈夫！わかってますよ艦長。僕は…そのためにいるんですから」

Ｏｔｈｅｒｓ　Ｓｉｄｅｏｕｔ

フェイト　Ｓｉｄｅ

時の庭園

「じゃあアルフ、母さんに会ってくるからここで待っててね」
「……あぁ、わかったよ」
アルフにそう言って私は母さんがいる部屋に入っていった。
「フェイト・テスタロッサ只今帰りました……！？」
部屋に入るとちょうど誰かが転移するところだった。……あれは！！昨日もずっと気になってたあの人だ！隣にいる女の人は初めて

見るけど……

私が声をかける前にその二人はどこかに転移してしまった。

「母さん！」

「フェイト…戻ってきていたの……」

「はい……その……今の二人はどうしてここに？」「……

……」

どうしても気になったので母さんに尋ねてみると、何かを考えているのか黙ってしまった。その間に母さんの顔を見てみると、いつもより顔色が良く見えた。

「……そんなことより、ロストロギア…ジュエルシードはいったいいくつ持ってきたのかしら」

「あ…はい。バルディッシュ」

「Ｐｕｔｏｕｔ」

バルディッシュからジュエルシードを出して母さんに渡した。

「……四つ。たったの四つなの？」

「……！……ごめんなさい母さん。やっぱり少なかったですよね」

あぁ、また母さんを失望させちゃったかな……母さんの娘なのに私が駄目だから……また鞭で打たれてもしかたない……

私は罰を覚悟して母さんの言葉を待っていた。

「……もういいわ。私はしばらく眠るから、次は必ず母さんを喜ばせてちょうだい」

「はい母さん……あの、それとこれ……お土産買ってきました。

口に合うかわからないですけど」
「……また行ってきてくれるわね？私の娘…かわいいフェイト」
「はい…！行ってきます、母さん」
母さんはケーキを受け取って、奥の部屋に入っていったので私もアルフのところに戻った。

「フェイト！！！大丈夫だったかい？どこか痛いところは？」
「大丈夫だよアルフ。今日は母さんには叱られてないから…お土産に買ったケーキももらってくれたよ」
「それ本当かい！？よかったじゃないかフェイト！」「うん！……
…あっ！後、私が母さんに会う前にあの男の子が母さんと会ってたみたいなんだ……」
「零が！？……本当に、一体何者なんだろうね？」
結局母さんから話は聞けなかったな……母さんとは知り合いで何か話してたのかな？……だから私の事を知っていて、何度も助けてくれたのかな……また会って話していろんな事を聞きたいな……

フェイト　Ｓｉｄｅｏｕｔ

『なぁイリス…なんか一瞬で戻ってきた割にはすごく久しぶりなよ

うな気がするんだけど…』
「えっ？そうかな……私はそんなでもないけど」
『う～ん…気のせいか』
「ところで零…本当にプレシアさんの事、言わないでおくの？」
『あぁ……だけどプレシアさんの本当の気持ちがわかったから原作みたいな事には絶対にさせない！』
「うん！さすが零！」
『それでイリスに聞きたい事があるんだけど…既に死んでしまった人を蘇させるのってしてもいい……わけなさそうだなその顔だと』

俺が言った言葉を聞いた瞬間、イリスの顔は真剣な表情になっていた。

「……零なら多分それをすることが可能だけど駄目だよ」

イリス曰く、俺が原作ブレイクしても問題はないのだが、死者を蘇させるということになるとそれは生きている者がしてもいい領域を越えてしまうらしい。死んでしまう前に助けるのならいいらしいが……

「もしそれをしてしまったら多分、後で天界からペナルティーが下されると思う。例えば術を使った者の命とか……」
『生き返らせたかわりに自分が死ぬって事か……』「だから零！絶対にしちゃ駄目だからね！そんな事したら私許さないんだから」
『……わかったよ』

俺はイリスに言われた事を考えながら自分の部屋に戻っていった。

夕方になってジュエルシードが発動した。
確か今日は木が取り込んで化け物みたいになったんだっけ……後ついにあいつらが出てくるのか。

「零！これって…」
『ジュエルシードが発動した！俺は行くけどイリスも来るか？』
「もちろん！」
『よしっ！レグルス、バリアジャケット展開。それにガンフォームＴｙｐｅ１』
「Ｓｉｒ　ｇｕｎｆｏｒｍ　ｔｙｐｅ１」
赤いマントを羽織ってレグルスをスナイパーライフルの形態にしておき、俺とイリスはすぐに転移した。

発動した場所は海鳴臨海公園だった。俺達が着いた時にはすでになのはとフェイトがいて結界も張られていた。
『これはまたでかいな……イリスは下がって見ててくれ！まずは様子見で一発』
俺はレグルスのスコープで狙いを定めて銃口に魔力を込めた。
「Ｂｒａｋｅ　ｓｈｏｔ」
俺が放った魔力の弾丸は狙いは完璧だったがシールドによって防が

れていた。

『やっぱりシールドがあったか……それなら……なのは！フェイト！』

「零くん！！」

「……！？」

『今から俺があの木の化け物の動きを止めるからその間に二人で仕留めろ！封印は俺がする！』

「任せて！」

「……わかった」

言い終わってすぐに俺は魔力を集中させた。あのシールドを破り直接当てて動きを封じる。

魔力変換……凍結

『行くぞレグルス！…凍てつく刃にて全てを凍らせ！フリーズドランサー！』

「Ｆｉｒｅ」

本来なら無数の氷の刃を相手に飛ばす魔法だが、今回はそれを弾丸に込めて撃った。放たれた弾丸はシールドを突き抜けて本体に当たった。すると、当たった箇所から凍っていきすぐに全て凍って動かなくなった。

『今だ！二人とも！』

「撃ち抜いて…ディバイン！」「Ｂｕｓｔｅｒ」

「……貫け轟雷！」

「Ｔｈｕｎｄｅｒ ｓｍａｓｈｅｒ」

二人の魔力に耐えれるはずがなく、木の化け物は消えジュエルシードが出てきた。

『このまま狙い撃つぜ』
「Ｓｅａｌｉｎｇ　ｍｏｄｅ　ｓｅｔｕｐ」
『ジュエルシードシリアル７！封印！』

レグルスから放たれた黒い閃光がジュエルシードを貫くと、辺りが白い光に包まれて収まると封印が終わっていた。

『よし終わったか……この封印したジュエルシードは二人でどうするか決めてくれ。俺はいらないから』

そう言って少し離れたところから二人を見ることにした。

「お疲れ様、零！…またあの二人が戦うの？」
『いや…今回は戦わず終わるよ……』

上から二人の会話が聞こえてきた。

「ジュエルシードには…衝撃を与えたらいけないみたいだ」
「うん…夕べみたいな事になったら私のレイジングハートも…フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だもんね」
「……！だけど譲れないから」
「私は…フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど。……私が勝ったら……ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら…お話聞いてくれる？」

二人が同時に前に出てデバイスを振りかぶった瞬間、ついにやつが

来た。

「ストップだ！……ここでの戦闘は危険すぎる！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「零……あの子は？」

『あぁ……あれはＫＹって呼べばいいよ……』

第十二話　O☆HA☆NA☆SHIって万国共通だよね♪（前編）（後書き）

作者〔祝！！！5万PV突破！！！〕

零［いつの間にかこんなにこの作品を読んで下さってるんだな］

作者〔もう本当に感謝感激です。皆様が読んで下さっているだけでやっていけてます〕

零［それに雨季様！またも感想をしていただきありがとうございます！］

作者〔これからも頑張っていきたいと思うのでどうぞよろしくお願いします！〕

零［感想、質問、要望などありましたらどんどん言ってやって下さい］

作・零〔［それでは次話でまた会いましょう！］〕

第十三話　O☆HA☆NA☆SHIって万国共通だよね♪（中編）

Other Side

数分前

「現地ではすでに三者による戦闘が開始している模様です」
「中心となっているロストロギアのクラスはA＋。動作不安定ですが無差別攻撃の特性を見せています」
「次元干渉型の緊急物品…回収を急がないといけないわね……クロノ・ハラオウン執務官、出られる？」
「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも！」
「それじゃクロノ…これより現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、両名からの事情聴取を」
「了解です！艦長！」
「気をつけてね～」
「……はい…いってきます…」

Other Sideout

「零、KYってどういう意味なの？」
『ん？……特に意味とかはないよ（嘘）。あいつの事はそう呼べばいいってだけ」
三人とも降りてきたけど……なのはとフェイトはいきなりクロノが現れたから戸惑ってるな。
「まずは二人とも武器を引くんだ……このまま戦闘行為を続ける

なら……」

なんかごちゃごちゃ言ってるな～。せっかくの二人の真剣勝負を邪魔しやがって……おっ！アルフが魔力弾形成してる。いいぞ！クロノを殺っちまえ！

「……！ふっ！」

アルフが放った魔力弾に気づいたクロノがシールドを張って防いだ。

『ちっ…やっぱり原作通り防ぎやがったか……』

「……ねぇ、零。もしかしてあの子の事嫌い？」

『……エ？ベツニソンナコトナイヨ？』

そう！！！別にフェイトが妹になるのが羨ましいわけじゃない！！！俺が一回でもフェイトから「お兄ちゃん」って言ってもらいたいわけじゃないんだ！！！

「……なんか零からどす黒いオーラが出てる気が……」

フェイト　Ｓｉｄｅ

「フェイト！撤退するよ、離れて！」

アルフを見るとすでに次弾の準備をしていた。

……撤退するならあのジュエルシードだけでも！

アルフが二人に向かって放ってできた爆煙に紛れてジュエルシードに近づいて取ろうと手を伸ばすといくつもの魔力弾が私に向かって放たれたのがわかった。

……！？速い！これは避けれない！……

直撃を覚悟した瞬間、誰かが間に割ってシールドで防いでくれた。

『よっと！判断はよかったけど周りが見えてなかったなフェイト』

「……！…君は！」

『悪いけど今回は諦めて下がってくれ。この状況はちょっときついだろ？』

……確かにさっき現れた時空管理局の人は私の一撃を軽々と止めてたし、今の攻撃だって速かった。

「……わかった。でも君は大丈夫？」

『余裕余裕！あれぐらい魔法を使わなくても勝てるって！……落ち着いたらまたこっちから会いに行くから。俺に聞きたい事がありそうだし……』

「……うん。待ってる」

こんな状況だけど、また会う約束ができて私は妙に嬉しくなった。

……？でもなんで会えるってわかっただけでこんなに嬉しくなるんだろ……？

そんな事を考えながらアルフとその場から転移で離れた。

フェイト　Ｓｉｄｅｏｕｔ

『これで二人とも逃げ切れるだろ。さてと……』「君は！？なぜあの二人を逃がしたんだ！」

……クロノがなんか言ってるけどどうでもいい……ていうか久しぶりだな……

誰かをぶっとばしてやりたいって思ったのは！！！

『フェイトに……何してんだよ！』

一瞬でクロノの背後に回り込んで、背中に回し蹴りを叩き込んだ。

「な！？うわっ！！！」

防御が間に合わずまともに喰らって吹っ飛んで倒れたクロノはふらつきながらも立ち上がろうとしていた。

かなり手加減したけど、今のを喰らって立てるか……さすがはアースラの切り札……まぁ、次の一撃で気絶させて終わらせるか。

俺が右腕に魔力球を形成している時に、俺とクロノの間になのはが割って入ってきた。

「だめぇ！撃たないで零くん！」

『なのは……』

クロノを庇うなのはに気をとられていると魔法陣が空中に現れた。
それには大人の女性が映っていた。

「申し訳ないけれどその子を許してあげてくれないかしら？」
「母さ……艦長！僕ならまだ「クロノ」……わかりました」

……しょうがない。クロノはもういいか。これ以上やるとなのはとイリスに怒られそうだし。

『……わかりました。だけど詳しい話を聞かせてもらえますか？俺はともかく、こっちの子は何もわかってないですから』

俺がなのはを指さして言うとリンディさんが頷いた。

「わかりました。それじゃあクロノ、その子達と一緒にアースラに戻ってきてくれるかしら」
「……了解です。すぐに戻ります」

そして俺とイリス、まだ戸惑っているなのはとユーノは、クロノと一緒に転移でアースラに移動した。

アースラ内に着くとかなり広いところに出た。歩いていくクロノについていくとなのはが念話で話しかけてきた。

（零くん…零くん…ここって一体どこか知ってる？）（ここは時空管理局の次元航行船の中だろうな。簡単に言えばいくつもある次元

世界を自由に移動するための船だな）
（……あんまし簡単じゃないかも……）
（ん～……ユーノ！説明任せた！）
（えぇ！？いきなり！？え～とね……）

ユーノがなのはに説明してるとイリスが俺だけに聞こえる様に声をかけてきた。

「ねぇ零。なのはには私が女神だって言っちゃだめだよ」
『わかってるよ。てか俺とイリスの素性を知られたら大変な事になるからな』

元１８歳のオタク野郎と女神だってわかったら、それこそなのは達がパニックになるだろうからな。

話し終わってなのはの方を見ると、まだ緊張した顔をしているので話しかけた。

『なのは。そんなに緊張しなくても大丈夫だぞ？』
「う、うん。そうなんだけど……」
『大丈夫！もし何かあったとしても俺が絶対に守ってやるから』
「零くん……／／／／／」

髪を撫でながら笑顔で言うとなのはの顔が赤くなった。すると隣にいたイリスが袖を引っ張ってきた。

「……私は？」
『え？当然イリスもだよ。当たり前だろ？』
「あ、うん。そうなんだ……／／／／／」

そんなやりとりをしながら進んでいくとクロノが何かに気づいたのか立ち止まった。

「あぁ、いつまでもその格好というのも窮屈だろう…バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

「あっ…そっか！そうですね…それじゃあ……」

そう言われてなのはがバリアジャケットとデバイスを解除した。ちなみに俺はここに転移する時に解除済みだ。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

「あぁ、そういえばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

言われてユーノもフェレットの姿から人間の姿に戻った。

「はぁ……なのはにこの姿を見せるの久しぶりになるのかな」

「…っっ……えっ…ふぇ……ふぇぇぇぇぇ！？！！！？！！！？！！」

後日談だがその時の声はメインブリッジまで聞こえてきたそうだ。

「なのは？」

「ユーノ君って！ユーノ君って！あの…その…なに～！え……だって、嘘！ふぇぇぇぇ！！！」

「君達の間に何か見解の相違でも？」

「えと…なのは。僕達が最初に出会った時って僕はこの姿じゃ……」

「ちがう！ちがう！最初っからフェレットだったよ～！」

「……！あぁ！！そそそ、そうだそうだ！ごめんごめん…

この姿は見せてなかった」
「だよね！そうだよね！びっくりした～！それで零くんはどうしてそんなに落ち着いていられるの！？」
『え？だって俺はわかってたし』
「私も～」
「なっ！……それならそうと教えてくれてもよかったのに～！」
「んんっ！……その…ちょっといいか？君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているのでね…できれば早めに話を聞きたいんだが……」

「艦長！来てもらいました！」
着いた部屋に入ると、盆栽やら鹿威しやらがある純和風の部屋だった。
『なんか日本を勘違いしてる外人に迎えられたみたいだな……』
「お疲れ様～。まぁ四人ともど～ぞど～ぞ。楽にして」
それからなのはとユーノはこれまでの経緯を話した。途中なのはがロストロギアについて聞いたりもしていた。その間、俺とイリスは口をはさまず聞いていた。
「なるほど……これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」
話が終わるとリンディさんがそう言った。

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」
「でも……そんな」
「次元干渉に関わる事件だ。民間人に介入してもらうレベルの話じゃない」
「でも！」
「まぁ…急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えてお二人で話し合って、それからあらためてお話をしましょう」
『あ～とりあえず終わったか……じゃあなのは帰ろうか。俺が送っt「待て！」……なんだKY、話は終わったろ？』
「誰がKYだ！僕はクロノだ！」
『え？だからKY（クロノ）って呼んでるだろ？』
「だから違うとい『ふざけるのはここまでにして用件は？』君から話をこじらせたんだろ！」
「クロノ……私から言います。先ほど、なのはさん達の事情は伺ったのでわかりました。しかしあなた達二人の事をまだ教えてもらってないのだけれど……」

……さてどうするかな。今はまだ管理局と行動すると制限されてめんどくさいからな……

『今日のところは帰らせてもらえませんか？また後日って事で……どうしてもっていうなら何も話さないまま今まで通りに俺達は好き勝手にやらせてもらいますけど……』
「なっ！？何を勝手な事を「クロノ！……わかりました。それではまた後日に詳しい話を聞かせてくださいね」……艦長！？」
『わかりました。じゃあ今日は失礼します』

最後にあいさつをして俺は他の三人と一緒に元の場所に転移した。

第十四話　Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩって万国共通だよね♪（後編）（前書き）

やっとこの話でサブタイ変えられる……

第十四話　Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩって万国共通だよね♪（後編）

俺達がアースラから公園に戻ってくると、すでに夕方になっていて空が暗くなり始めていた。夕日で赤く染まっている海を見ているとなのはがイリスに声をかけた。

「あの…イリスさん。イリスさんも零くんが魔法を使える事知ってたんですね」「……うん。だから温泉の時に、私と零の事を詳しく話せなかったんだ」

「そうだったんですか…」「だからこの事は他の人やなのはちゃんの家族には内緒にしてね？」

「はい！わかりました！」『……とりあえず今日はもう帰ろうか。なのは達もこれからどうするか考えたいだろ？』

「うん…じゃあ零くん。またね」

帰ろうと歩きだしたなのはを俺は呼び止めた。

なのは　Ｓｉｄｅ

『なのは！』

家に帰ろうとフェレットの姿に戻ったユーノ君を肩にのせて歩きだすと、後ろから零くんに呼び止められた。

「零くん？」

『……俺は時空管理局とかそんなのは関係なく、なのはが決めた事に協力するから。だからなのはは自分がやりたい事を考えればいいよ』

悩んでいた私にそんな言葉を言ってくれた。

「……どうして……なんで零くんは私に協力してくれるの？私は零くんに助けられてばかりなのに…」

ずっと気になってた事を零くんに聞いてみた。

すると零くんは少し考えて恥ずかしそうに答えてくれた。

『俺は自分がしたい事をやってるだけだよ……なのはの笑顔が見たいから……ただそれだけなんだ』

それを聞いた私は顔が真っ赤になってしまった。

……ど、ど、どうしよう！？零くんの顔が見れないよ～／／／／／／……さっきの零くんすごいかっこよかったな……なんだろうこの気持ち。胸がすごいどきどきしてる……なんでだろ？

『じゃあ、これからどうするか決まったら連絡くれ。それじゃあ！』

そう言って零くんとイリスさんは帰っていった。

……さっき零くんが言ってくれたおかげで自分が本当にやりたい事が決まった。

…私は最後までやり通したい！フェイトちゃんとしっかりお話したい！

そう心で強く思って家に帰った。

なのは　Ｓｉｄｅｏｕｔ

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅ

「すごいや～！どっちもＡＡＡクラスの魔導師だよ～！特にこの赤い服の子は魔力変換資質を持ってるし…クロノ君でも勝てなかったしね～」

「エイミィ！」

クロノ達が三人のデータを解析していると扉が開く音がした。

「あ！艦長！」

「あぁ、三人のデータね」「はい…」

「確かにすごい子達よね……あの子達、なのはさんとユーノ君がジュエルシードを集めている理由はわかったけど…こっちの黒い服の子はなんでなのかしらね？」

「…それに神童達もです。あれだけの魔力と実力を持ちながら管理局には一切のデータがない……」

「そうね…引き続き調査をお願いね」

「「わかりました」」

……できればあの子達には協力してもらいたいのだけれど……

Ｏｔｈｅｒ　Ｓｉｄｅｏｕｔ

フェイト　Ｓｉｄｅ

「ダメだよ！時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ……逃げようよ…二人でどっかにさ……」

なんとか逃げきって家で休んでいるとアルフがそう言い出した。

「それは…だめだよ」

「だって！雑魚クラスならともかく、あいつ一流の魔導師だ！…本気で捜査されたらここだっていつまでばれずにいられるか……あの鬼ババ…あんたの母さんだって訳わかんない事ばっか言うし！フェイトに酷い事ばっかするし！」

「母さんのこと悪く言わないで…」

「言うよ！だってあたし、フェイトの事が心配だ！…フェイトが悲しんでるとあたしの胸もちぎれそうに痛いんだ……フェイトが泣いてると、あたしも目と鼻の奥がツンとしてどうしようもなくなるんだ……フェイトが泣くのも悲しむのも、あたし嫌なんだよ！」

アルフは泣きだしてしまった。

……これも私が弱いせいだ……

「……私とアルフは少しだけど精神リンクしてるからね…ごめんね。アルフが痛いなら、私もう悲しまないし、泣かないよ」

「……！私は！フェイトに笑って、幸せになって欲しいんだけなんだ！…なんで！…なんでわかってくれないんだよ！」

泣き崩れてしまったアルフの頭をなでながら私は今の気持ちをアルフにいった。

「ありがとうアルフ。でもね、私母さんの願いを叶えてあげたいの……母さんのためだけじゃない…きっと…自分のために。だから後もう少し…最後まで後もう少しだから、私と一緒にがんばってくれる？」

そう言うと、アルフは顔をあげて

「約束して……あの人のいいなりじゃなくて…フェイトはフェイトのために、自分のためだけに頑張るって…そうしたら、私は必ずフェイトを守るから」

「……うん」

フェイト　Ｓｉｄｅｏｕｔ

家に帰るとイリスが聞いてきた。

「それで時空管理局の人達にはなんて言うの？」

『う～ん……まぁ、適当な事言って協力するとだけは言っとくか。フェイトの方も気になるし、それにプレシアさんの事もあるから管理局を無視はできないし……』

「そっか…私は零についてくからそれでいいならいいんだけど」

……なのはが管理局に協力し始めてから海にある6個のジュエルシードが見つかるまで、だいたい十日ほどあるからその間にいろいろやりたい事もあるし。

……それにあれから現れてないあいつの事も考えておかないと。今の俺は実戦経験がないので俺と同じ力を持っているあいつには今のままだと勝てない……それに……

『イリス…悪い……』

「え？何か言った？」

『……いや、なんでもないよ。それじゃあリンディさんに連絡するか』

目の前に魔法陣をだすとそこにはクロノやリンディさん、それにエイミィも映っていた。

「連絡をくれたって事は、あなた達の事を教えてくれるのかしら？」

『……協力はします。しかし条件があります…俺達の事は詮索せず自由に行動させる、なのは達も協力させる…これでどうですか？』

「なっ！？話が違うだろう！それにさっきも言った通り、この事件は一般人が関わるレベルじゃない！ましてやなんの情報もない君達が協力するとは思えない！」

『……多分もうすぐユーノから連絡がくる。自分達を協力させて欲しいって内容だろう。だから俺も協力する……それにリンディさんは違う考えなんじゃないですか？……それでどうします？』

しばらく考えていたリンディさんが顔をあげた。

「わかりました。その条件でいいでしょう」

「艦長！？」
『そうですか…それじゃあまた後でなのは達とそっちに向かいます』
通信を切ると。イリスが驚いたように聞いてきた。
「よくあんな無茶な条件が通ったね？」
『ん？まぁ管理局も人手不足だし、アースラの切り札であるクロノは出来るだけ温存しておきたいんだろ』

それからしばらくたって
今、俺とイリスはなのはの家から少し離れたところでなのは達を待っている。
あの後ユーノから連絡があって、時空管理局に一時的に身柄を預けることになったと聞いたので二人と一緒に行くために外で待っていることにした。
「あっ！零くん！」
俺を見つけるとなのはが走ってきた。その背中にはリュックをしょっている。
『そんなに急ぐとこけるぞ～』
「え？…ふにぁあ！？」
……って言ってるそばから……

『っと！大丈夫か？』

間一髪で抱きとめる様な形でなのはを助けることができた。

「ふぇ／／／／／あの…その…ありがとう／／／／／」

……めちゃくちゃ可愛いんですが！！しかもよくよく考えるとこれってかなりやばい体勢なのでは……

『って痛い痛い！！！いきなり耳を引っ張るなイリス！』

「まったく！いつまでそのままでいるつもり？」

イリスに言われてなのはをまだ抱きしめてる事に気がついてすぐに離した。

『おわっ！？ごめん！』

「うん…こっちこそごめんね……／／／／／」

その後イリスから恐ろしいほどの殺気が感じられたがごまかすようになのはに話しかけた。

『そういえば…家族には話したのか？』

「……お母さんに話したんだ。魔法の事やユーノ君の事は言えなかったけど、他のみんなに説明してくれるって」

『そっか…それじゃあこれからがんばらないとな。俺も出来るだけ協力するよ』「うん！ありがとう零くん！」

そして俺達は再びアースラに向かった。

第十四話　O☆HA☆NA☆SHIって万国共通だよね♪（後編）（後書き）

作者〔皆様お久しぶりです。今回でやっと終わりました〕

零［これわざわざ前、中、後編に分けた意味あるのか？］

作者〔……この作品を読んで下さった皆様には感謝感激です！〕

零［ちょっと待て！！！この後書きだって久しぶりなのになんで終わらせようとしてるんだ！］

作者〔え～～～……じゃあどうする？誰か呼んじゃう？そういえば今回なのはにセクハラを……〕

零［違うだろ！あれはギリギリだったから決してわざとじゃないんだ！］

作者〔どうだった？えっ？なのは可愛いかったのか？〕

零［……黙秘］

作者〔ちっ……つまらんな……またイリスに怒られればいいのに〕

零［……あのイリスの殺気にはマジで殺られるかと思った……］

作者〔まぁ今回は諦めて次回には誰かよんでくるか！〕

零［……ていうかここに連れてきていいのか？］

作者〔もちろん！後書きだからｂ〕

零［はぁ…それでは皆様次話でお会いしましょう］

作者〔結局寝れなかった……ｏｒｚ〕

第十五話　それぞれの思い（前書き）

今回は初めてパソコンからの投稿です。

しかし今回は自分でも反省の点が多くあります・・・無駄に投稿遅くなってしまったし・・・

次話ではさらに精進していきたいのです！

それでは本編をどうぞお楽しみください！

第十五話　それぞれの思い

アースラ

俺達がアースラに移ってから数日が過ぎた。そして今、俺はクロノを探してアースラ内を歩いていた。

『え～と…教えてもらった部屋は……おっ！あったあった！』

さっき通りすがった局員の人に聞いた部屋に入ると、クロノとエイミィがモニターを見ながら話していた。

『ち～す！二人ともそんな難しい顔してどうしたんだ？』

「あっ！零君こんにちわ～！」

「神童か……見ればわかるだろ？残りのジュエルシードを必死に探しているところだよ」

『ふ～ん……まぁそんな事はいいや。それよりクロノ、今日もまた戦闘局員の人で何人か暇な人いない？お前でもいいんだけど…』

「そんな事って……無理だろうな。今アースラの局員はほとんどがジュエルシード捜索に人員を使ってる。僕だって忙しいんだ！』

『え～～～……それならしょうがない。ならお仕事頑張って下さいそれじゃあ！』

「おい！ちょっと待て！！」

ちっ！何か言われる前にさっさと逃げようと思ったのに…

『……ナニカ？』

「だいたい君はここに来てから僕や局員達と模擬戦ばかりしてジュエルシードの捜索に全く協力してないじゃないか！」

あ～そういえばそうだった。実戦積むために最近は模擬戦ばっかやってたからな……もちろん、普通にやったら意味ないから自分にリミッターとかかけてたけど…後はイリスにばれないようにアレを使えるように訓練してたし……

「聞いているのか！！」
『はいはい聞いてますよ……ったく！これで文句ないだろ？』
「Ｐｕｔｏｕｔ」

俺はレグルスから？１２のジュエルシードを出した。

「零君それって！！」
「ジュエルシードじゃないか！！！一体いつの間に！？」
『これか？これは昨日暇な時間ができたから探して封印しといた』
「……まったく呆れるな。僕達が必死に探してるのにそんなに簡単に探せるなんて…君ならすでに他のジュエルシードの場所を知ってるんじゃないか？」
『……そんなわけないだろ』

はい嘘です。実際はどこにあるか全部確認済みです。…だけど俺もいろいろやりたい事があるから捜索には時間がかかったほうが好都合なんだよね。

「…まぁいい。それより今日はこれからどうするんだ？」
『ん～とりあえず海鳴市に行こうかな』
「二人には会っていかないのか？」
『今なのはとユーノ忙しいだろ？まぁよろしく言っといてくれ』
「わかった。…しかし最優先なのはジュエルシードだということを忘れないでくれよ？」

『あいよ。了解了解！それじゃ』

俺はその場で海鳴市に転移した。

『さてと、士郎さんか恭也さんがいればいいんだけど』

海鳴市に着いてどこに行こうかと考えて、結局翠屋に行くことにした。

今イリスは家でこの前現れたやつの事を調べてくれているのでお土産にケーキを買っていこうと決めた。そのついでに二人に模擬戦でも頼もうかなっていう考えだ。

少し歩いて翠屋に着いて店の中に入ると見覚えのある二人がいた。

「いらっしゃいませ～！あら？神童君！」

『こんにちわ桃子さん……それにアリサとすずかも。二人は温泉以来かな』

「うん。久しぶりだね零くん」

「ちょうどいいわ！あんたに聞きたい事があるからちょっと付き合いなさいよ！」

アリサが自分とすずかが座っている席の空いているところを指さして、無理とは言わせない雰囲気を出していた。

『別にいいけど……あっ桃子さん！今士郎さんか恭也さんいますか？』

「…？二人とも今は少し出かけていないけど…どうしたの？」

『いえ…少し頼みたい事があったんですが…それならいいです』
桃子さんにお礼を言ってアリサとすずかがいる席に座った。
『それで？俺に聞きたい事って？』
「実は少し前からなのはちゃんが学校を休んでるの」
「それで今日なのはのお母さんに聞きに来てみたけど詳しいことは聞けなくて…というより詳しい事を知らないって感じだったわね」
『……だけど桃子さんに聞けなかった事をどうして俺に？』
「この前なのはにあんたの事を聞いたときなにかを隠してるのがバレバレだったから…だから今回の事にあんたも関わっていると思って」
…まぁなのはに隠し事は無理だろうな
「それで！どうなのよ！」
「零くん…教えてくれないかな？」
『ごめん……だけどもう少し…後少しで終わるからそれまでなのはの事を信じて待っててやってくれないか？』
俺がそう言うと二人は顔を見合わせた。そしてアリサがわざとらしくため息をついた。
「まったく！しょうがないわね、あんたの言葉を信じてあげるわよ！ただし！なのはになにかあったら許さないんだから！」
「もう…アリサちゃんったら。零くん、私も信じるよ」
『二人とも…ありがとう』
それから少し二人と話をして俺は店を出た。

『これからどうしようかな。まだ時間もあるし……フェイト達の手伝いにでもいこうかな』

あの日以来会ってないし、それに会いに行くって約束したからな。その事を思いだしてフェイト達が住んでいる辺りに行くと、偶然にもフェイトが家に帰るところを見つけた。

『ちょうどよかった！……それにしてもなんか危なっかしいな。ふらふらしてちゃんと歩けてないし…それにアルフは？……あぁ離れてるけど後ろにいるか』

いつまでも見ててもしょうがないと思いフェイトのもとに向かおうとした時、俺が見た光景は、フェイトが気づいていないのか赤信号を渡って車に轢かれそうなところだった。しかも助けようにもこの距離だとどんなに速く助けようとしても間に合わない…

『っ！くそ！上手くいってくれ！！！！！！』

フェイト　Ｓｉｄｅ

今日もまだジュエルシードを見つけられてない…やっぱり時空管理局に見つからないように探すのは少し大変だ…だけど母さんのためにがんばらないと。それにアルフにもがんばってもらってるんだ。

そんな事を考えてると後ろからアルフの叫ぶ声が聞こえた。

「フェイト！！！！！」

…どうしたんだろ？

私が意識をはっきりさせて顔を上げるとすぐ目の前に車が見えた。

…あぁ、赤信号だったんだ……アルフごめんね。私のわがままにつき合わせちゃって……母さんの優しい笑った顔、もう一度見たかったな

目をつむる時間もなく車にぶつかるはず

……だった。

いつの間にか私は横断歩道を渡ったところにいて、そこには

『……よかった……なんとか……』

いつも私が危ないところを助けてくれて、私がまだ名前を呼んだことがないあの人がいた。

私が無事なのがわかると急に倒れてしまった。

「……！！どうしたの！？大丈夫？」

「フェイト！！大丈夫かい！？一体今何が？」

「わからないけど、気づいたらここにいて……それでこの人が目の前で倒れたの」

「この人って…零じゃないか！一体なんで……ちっ！人が集まってきたね。とりあえずうちに帰ろう、零は私が運ぶよ」

「…そうだね。お願いアルフ」

私達は急いで家に向かった。

フェイト　Ｓｉｄｅｏｕｔ

『ん……ここは？』

気がつくと俺はベッドに横になっていた。

…確かフェイトを助けるために……

『そうだ！！フェイトは！？』

「……そこにいるじゃないか」

思い出してベッドから飛び起きようとしたが右手が握られてることに気づいて、声の方を見るとアルフと俺の右手を握りながら寝ているフェイトがいた。

「やっぱりフェイトってば無理してたんだね……最近はほとんど寝ないでジュエルシードを探してたから」

『フェイト……よかった。なんとか助けられたみたいだな』

寝ているフェイトの頭を撫でているとゆっくりとフェイトが目を覚ました。

『悪い起こしちゃったか？』

そう聞くと自分の寝顔を見られた事や頭を撫でられていることに気づいたのか顔が真っ赤になった。

「……／／／／／／／／／／／／／／」

うわ～やば萌えだ……
その時のフェイトはかなりの可愛さだったのでしばらく頭を撫で続けてた。

しばらくして落ち着いたのかフェイトが急に頭を下げた。
ちなみに、もう俺は頭を撫でてないし右手も握ってもらってない。

「遅くなったけど…さっきはありがとう。君が助けてくれたんだよね」
『お礼なんていいよ」
「私からも言わせてもらうよ。ありがとう零！」

二人から急にお礼を言われたので照れてしまった。それをごまかすように二人に聞いてみた。

『あ～それより！やっぱり管理局に見つからないようにジュエルシードを探すのはきついよな？』
「……うん。あれから一つも見つけられてないんだ」
「そういえば私達が管理局から逃げた後、あんたはどうしたんだい？」

アルフに聞かれたので、あの後なのはと一緒に一時的に管理局に協力することになったのを話した。

『だけど管理局に協力することになったからって俺がやることは変わらないよ。自分がしたい事をやるだけ』

それを聞くと二人は安心してくれた。それからはフェイトに質問されてばかりだった。

この前はなぜ時の庭園にいたのかとか、プレシアさんとは何を話してたのかとか、その時一緒にいた女の人は誰なのかとか……

俺は所々ごまかしながら大体の質問に答えてあげた。

『かなり話したから喉渇いたな。なんか飲み物買ってくるけど何がいい？』

「あたしはオレンジジュース！」

「じゃあ私もアルフと同じので」

『じゃちょっと行ってくるわ』

１０分後

『ただいま～』

「あ…おかえり」

「やけに遅かったじゃないか」

『ちょっと一回家に帰ってたからな…はいこれ』

ジュースを買いに行くついでにイリスに買ったケーキを家に置きに行った。それと……

「……どうしたの？」

「あんた…なんか顔がにやけてるよ」

『いや…ここでちょっとした問題です！俺が持っているこれはなんでしょうか？』

「それは！？」

「ジュエルシードじゃないか！？」
『正解！』
さっきジュースを買ってくるついでに一つ見つけてきといた。発動前だったからかなり楽だったけど…
「それ…私に譲ってもらえないかな？」
『そのために探してきたんだけど…条件がある』
「……条件？」
俺はその条件をフェイト達に言った。一つはジュエルシードを探すにしても無理はしないで休みをいれること。そしてもう一つは……
『俺の事を君とかじゃなくて零って名前で呼んでくれ…アルフはもう呼んでくれてるけど』
「……わかった……ぃ……零」
『よし！じゃあフェイト、これは渡しておくよ』
「うん…ありがとう零……／／／／／」
『それじゃあそろそろ帰らせてもらうよ』
「もう行くのかい？」
『まだ最後に行くとこがあるから……』
「そっか…今日は本当にありがとう」
『いいっていいって。っと、最後にフェイトに聞いておきたい事があった』
「……？」
俺は一旦気持ちを真面目に切り替えて聞いてみた。
『……フェイトはどんな事をされてもお母さんの事信じられるか？』

そう聞くとすぐに返事が返ってきた。

「うん…だって家族だもん。信じられるよ」

『……そっか。急にこんなこと聞いてごめんな』

俺が帰ろうとすると、アルフから念話がきた。

（零、また来ておくれよ。フェイトがあんなに楽しそうにしてたのは久しぶりだよ）

（もちろん！俺でよければまた来るよ）

俺はそのままフェイトの家を出て今日最後の用事を済ませに転移をした。

『いや～あらためて見るとここかなり広いな～』

「……前もそうだったけどいきなり現れるのはやめてくれないかしら？」

俺が部屋の見回しているとプレシアさんが奥の部屋から出てきてそう言った。

『こんにちわプレシアさん。具合は……あんまり良さそうじゃないですね…』

「……こんなところまで世間話をしにきたわけじゃないでしょう？だいたいあなたは今管理局に協力しているという事はあなた自身が監視されているのでは？」

『それなら大丈夫ですよ。初日に気づいてから俺の行動がわからないように認識阻害の魔法かけてますから』

ったく……いくら俺達の素性がわからないからって人のプライベートを探ろうとしやがって……

「そう……それで一体何の用件かしら？」

『……あなたのこれからの行動についてです。あなたの本当の気持ちは前に聞きしました……それに、今日フェイトに会って聞いてみました。どんな事があっても自分の母親を信じることができるかって…それにフェイトは迷わずに信じることができると答えました。……あなたはそれでもジュエルシードを使ってアルハザードを目指すんですか？』

俺が言葉を言い終わるとしばらくプレシアさんは黙っていた。

「……もうここには来ないでちょうだい」

『プレシアさん！！』

「……それでも……私はアリシアを取り戻さなければいけないのよ…私のせいでアリシアは死んでしまったのだから……」

『それは！プレシアさんのせいではなく当時の上層部が無茶な命令をしたからであって……』

「それに…もう私は永くはない……だから、せめてフェイトが私がいなくなっても悲しまないようにふるまうわ」

『……わざと酷くあたってフェイトを自分から離れさせるつもりですよね？』

「……あなたに私がいなくなった後のフェイトをお願いしたいのだけれど」

『それは……ただ逃げてるだけですよ……もう無理だって諦めて現実から目をそむけようとしてるだけだ……』

「……」

『俺はもうここには来ません。それにプレシアさんのその願いもきくことはできませんから』

俺はそれだけ言い残して時の庭園から転移していった。

家に帰るとイリスが疲れていたのかリビングのソファーで寝ていた。

『…まったく。こんなとこで寝たら風邪ひく……って女神だから風邪はひかないのかな…よいしょっと！』

俺はイリスを抱えて部屋で寝かせてやるためにベッドまで運んだ。

寝ているイリスに謝るように俺は言った。

『イリス……決めたよ……俺は……』

そう言ってイリスの部屋から出ていった。

第十五話　それぞれの思い（後書き）

作者〔逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ！〕

零［……いきなりどうしたんだお前……もう後書き始まってるぞ］

作者〔いやね……かなり間が空いてしまったからもうこの作品読んで下さる皆様がいないんじゃないかと恐くなって……〕

零［それは自業自得だろ…］

作者〔ぐっ！それは…その通りです……ｏｒｚ〕

零［ほら！気を取り直して。今回はゲストが来てるんだろ？］

作者〔はっ！？そうだった！……よしっ！！！いつまでもうじうじしてないでゲストを呼ぼう！それではどうぞ！〕

なのは［にゃはは…どうも高町なのはです。今日はよろしくお願いします！］

作者〔ということで今回は未来の悪魔……もとい魔王なのはに来てもらいました～！〕

なのは［ふぇっ！？私悪魔でも魔王でもないよ～！］

零［あぁ……そっか……そういえばそうだったな……ちっちゃいなのはが可愛くてすっかり忘れてた…］

なのは［零くんまで！？もう～ひどいよ～！］

作者〔まぁまぁ恒例のあいさつもこれくらいにして……それではなのはに質問です！現時点で零のことをどう思ってる？〕

零［ちょ！コラ作者テメ！うわっなんだこr……］

作者〔まぁ本人がいたら言いにくいだろうから零には少しの間退場してもらおう〕

なのは［……あのなんかよくわからない黒い物体に飲みこまれていなくなっちゃったんですけど……零くん大丈夫なんですか……？］

作者〔大丈夫！大丈夫！ちょっと生死の境をくぐるだけだからb…それで零のことはどう思ってるのかな？〕

なのは［え…と…零くんは初めて会った時に私のことを助けてくれて、それから私が悩んでいた時も零くんが後押ししてくれました。いつもつらいときにそばにいてくれる優しい人で…それにかっこいいし…最近は零くんのことを考えると胸がどきどきします……／／／／／］

作者〔……〕

零［ふぅさっきのはかなり危なかった……ってぇ！？またかy……］

なのは［零くん！？作者さん！今度はいきなり出てきた穴に零くん

が！？」

作者「うん……まぁ大丈夫……じゃなくていいよ。それよりそろそろこの作品を読んで下さった皆様に感謝を！」

なのは「えと……読んでくれた読者の皆さんにはかんしゃかんげきです！」

作者「それでは皆様また次話で！」

なのは「……零くん大丈夫かな……？」

第十六話　再来（前編）（前書き）

そろそろ一期も終盤です！

これから戦闘多くなってくると思うと……

第十六話　再来（前編）

アースラに来てから１０日が過ぎ、俺とイリスは艦内を歩きながら今日の手筈の確認をしていた。

「零…本当に今日なの？」

『あぁ、間違いないよ。だから昨日決めた手筈通りアースラの方はイリスに任せたよ』

「うん…だけど気をつけてね…いつあの子が現れるかわからないから…」

『そうなった時は…なんとかするしかないなぁ…』

イリスがこの１０日間、俺を襲ってきたやつの事を調べてくれたが素性も目的もわからなかった。

「せめてその場に私もいれればいいんだけど」

『大丈夫！俺もあれから何もしてなかったわけじゃないし、それに今はレグルスもあるしな！』

「Ｐｌｅａｓｅ　ｌｅａｖｅ　ｉｔ」

「そうだね…うん！零なら大丈夫だよね！それなら腹が減っては戦はできぬ！食堂に行こっ！」

イリスに手をひかれながら食堂に向かうとなのはとユーノが座ってお菓子を食べていた。

「こんにちわなのはちゃん、それにユーノ君も」

「イリスさんと零くん！」

『二人ともなんか久しぶりだな』

広いところに二人で座るのも寂しいので、俺はユーノの隣にイリスはなのはの隣に座った。

『確か今日もジュエルシードの探索に行ってたけどどうだった？』

「それが……今日も空振りだったんだ……」

「…もしかしたら、結構かかるかもしれない…三人ともごめんなさい」

自分を責めているのかユーノが俯きながら謝ってきた。

『別にユーノが悪い訳じゃないだろ？俺とイリスは勝手に協力してるだけだし…なぁなのは？』

「そうだよ！ユーノ君が謝ることじゃないよ！」

「だけどなのはは寂しくない？家族や友達と会えなくて…」

「別に…ちっとも寂しくないよ。ユーノ君やイリスさん、それに零くんも一緒だし！ひとりぼっちでも結構平気…ちっちゃいころはよく独りだったから…」

なのはが昔のことをぽつぽつと話し始めた。

「うち、私がまだちっちゃいころにね…お父さんが仕事で大怪我しちゃってしばらくベッドから動けなくなったことがあるの。喫茶店も始めたばかりで今ほど人気がなかったから、お母さんとお兄ちゃんはいつもずっと忙しくて…お姉ちゃんはずっとお父さんの看病で…だから私、わりと最近まで家で一人でいることが多かったの……だから結構慣れてるの」

これなのはにとってはトラウマのようなもんだよな…そのせいで自分は一人でも大丈夫…自分でなんとかできるっていう脅迫概念みた

いのがあるんだよな…

「そう…なんだ」

『なのは……』

「そういえば私達お互いのことあんまりしらないよね……いろいろ片付けたら、もっとたくさんみんなでいろんなお話ししようね」

「うん…いろいろ片付いたらね…」

……いろいろ片付いたら……この事件が終わった時には……きっと俺は……

【エマージェンシー！！！捜査区域の海上で大型の魔力反応を感知！！】

突然、アースラ内で警報とともに局員からの通達が響き渡った。

アルフ　Ｓｉｄｅ

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌きたる天神よ、今導きのもと降り来たれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル…」

……ジュエルシードは多分海の中。だから、海に電気の魔力流を叩き込んで強制発動させて位置を特定する。そのプランは間違ってないけど…でも…フェイト！

「撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス！ハァァァ！！！！！」

詠唱が終わってフェイトが海に向かって魔力を叩き込むと、いくつもの目玉のような魔力球から雷が放たれた。すぐに海の中にあったジュエルシードが強制発動して何本かの光の柱があちらこちらに出てきた。

「ハァハァ…見つけた！残り六つ！」

……こんだけの魔力を撃ち込んで、さらに全てを封印して…こんなの！フェイトの魔力でも絶対に限界越えだ！

「アルフ！空間結界とサポートをお願い！」

「ああ！任せといて！」

……だから、誰が来ようが、何が起きようが、あたしが絶対守ってやる！

アルフ　Ｓｉｄｅｏｕｔ

なのは　Ｓｉｄｅ

「なんとも呆れた無茶をする子だわ…」
「無謀ですね、間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を超えている！」
私が警報を聞いてから急いでリンディさんのところに向かうと、モニターにフェイトちゃんが映っていた。
「フェイトちゃん！！あの！私急いで現場に！」
「その必要はないよ。ほうっておけばあの子は自滅する…仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」
「でも……」
「今のうちに捕獲の準備を」
「了解」
モニターに目を向けると、ジュエルシードの魔力流によってフェイトちゃんとアルフさんがまるで海そのものに襲われているような状況で弱ってきてるのがわかった。するとリンディさんが私にモニターを見たまま声をかけてきた。
「私達は、つねに最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど…これが現実」
「でも……」
『でもそれはそちらの都合ですよね』
後ろからその声が聞こえたので振り返ると零くん、イリスさん、ユーノ君の三人がいた。
『ユーノ、なのはと先にフェイト達のところに行ってくれ』

「なっ！？何を言ってるんだ！」
「零……わかったよ。行こうなのはゲートは僕が開くから」
「でも！…私があの子と、フェイトちゃんと話しがしたいのは…零くん達やユーノ君とは！」
「…関係ないかもしれない。だけど僕はなのはが困ってるなら力になりたい…なのはが僕に、そうしてくれたみたいに」
『…だってさ。まぁ俺とイリスはもとから管理局じゃなくなのはに協力してたわけで…』
「だからなのはちゃんは気にせずにあの子達のところに行っていいんだよ」
「……ありがとう」

私はみんなにお礼を言ってユーノ君が開いてくれたゲートに走った。

「君達は！」
「ごめんなさい。高町なのは、指示を無視してかってな行動をとります！！」
「あの子の結界内へ、転送！」

気がつくと私は空から落ちていた。

「行くよ、レイジングハート…風は空に、星は天に。輝く光はこの腕に、不屈の心はこの胸に！レイジングハート！セートアップ！！！」
「Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ」

なのは　Ｓｉｄｅｏｕｔ

なのはとユーノも向こうに着いたし、そろそろ俺も行くかな。
『じゃあイリス、後よろしくな』
「うん！気をつけてね」
「馬鹿な！何をしてるんだ君達は！」
『まぁまぁ、文句なら後で聞くしジュエルシードだって回収してくるから』
「そういう問題じゃなく」

クロノの言葉を最後まで聞かずに、フェイト達がいる結界内に転移した。

結界内に転移するとジュエルシードの魔力が暴走していて、竜巻やら魔力流やらがいくつも発生していた。それをユーノとアルフがチェーンバインドで必死に押さえ付けている。

…そんじゃ、いっちょやりますか！

『全員！一度俺の後ろに後退してくれ！』

「「「「零！、零くん！」」」」
『一気に封印するために、まずはこの状況をなんとかする！かなり離れないと巻き添えくらうぞ！』
俺がそういうと四人ともすぐに後退してくれた。
「Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ」
俺はレグルスを広域範囲魔法に特化した杖の形態にした。その杖は十字架をそのままでかくしたような、かなりシンプルな形だ。
『座標固定。範囲は結界内部特定』
「Ｓｉｒ．　Ａｒｅａｃｏｒｄ…ｅｎｔｅｒ」
『…風、光の波動の静寂に消える時。闇に生まれし精霊の吐息が彼の者に永久を与えん！ダイヤモンドダスト！』
詠唱が終わると空気中が急速に冷却されていき、ジュエルシードの魔力流や結界内の海も全てが凍りついた。
「海が凍った……」
「零くん、凄すぎだよ……」
「一体…零にはどれほどの魔力が…」
「…夢でも見てるのかね」
…なんか後ろの方で四人が唖然としてるけど、いつまでもこのままだと寒いからさっさと終わらせないと
『これでしばらくは大丈夫だから今の内に、なのはとフェイトの二人で封印してくれ！』

「うん！フェイトちゃん二人でせーので一気に封印！」
「Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ」
「……」
「Ｓｅａｌｉｎｇ　ｆｏｒｍ　ｓｅｔｕｐ」「バルディッシュ！？……」
「ディバインバスターフルパワー…いけるね？」
「Ａｌｌｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

「せーの！！！」
「サンダー！！！！……」
「ディバイン！！！！……」
「レイジー！！！！！！」
「バスター！！！！！！」

二人の魔力が合わさった衝撃波で凍った海や近くの岩場が砕けて吹き飛んだ。

「ジュエルシード、６個全ての封印を確認しました！」
「なっ……なんてでたらめな……」
「でもすごいわ……」
「……そろそろかな」

衝撃波が収まるとなのはとフェイトのところに封印された６個のジュエルシードが出てきてた。
いつのまにか空が晴れ、ジュエルシードを見ている二人に光が差し込んできた。
すると、なのはがフェイトに声をかけた。

「ともだちに…なりたいんだ」

第十七話　再来（後編）（前書き）

前回の投稿からかなり日がたってしまいようやくの投稿です。

・・・スランプだったのかな

第十七話　再来（後編）

イリス　Ｓｉｄｅ

【ＡＬＥＲＴ】【ＡＬＥＲＴ】【ＡＬＥＲＴ】【ＡＬＥＲＴ】【ＡＬＥＲＴ】

私がアースラで待機していると予定通り警報音が艦内に鳴り響いた。

「次元干渉！？別次元から本艦、および戦闘区域に向けて魔力攻撃きます！！あ、後６秒！」

「えっ！？」

「させないよ！！」

私がアースラを防御壁で覆い張ると同時に次元の狭間から雷が放たれてきて、ギリギリ防御が間に合った。

「イリスさん、今の防御壁はあなたが？」

「そうですけど……今はそんな事より局員の人達に指示をお願いしますリンディ艦長」

「そ、それもそうね…次弾に備えて対魔力防御！……それから、なのはさんとユーノ君、それに零君とクロノを回収します」

…クロノ君、いつの間に向こうに行ったんだろう……でもそんなことより、零の方はうまくやれたかな……

イリス　Ｓｉｄｅｏｕｔ

なのはがフェイトの返事を待っているのを見ていると、いきなり空が光ってなのは達のすぐ側に雷が落ちてきた。

「っ……！母さん！？」

ちっ……やっぱりプレシアさんの考えは変わらなかったか。なら、フェイトとなのはに攻撃が当たる前になんとかしないと……せっかくこの姿なんだし使ってみるか…

『――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ』

俺は頭で銃の引き金を引くイメージをして自分の魔術回路を起動させた。そして詠唱しながら二人の側に行き、その名を解放する。

『”熾天覆う七つの円環”（ローアイアス）！！！』

フェイトに雷が直撃する寸前に七つの花弁が展開され攻撃を防いだ。

『くっ…やっぱりプレシアさんの魔法はかなり強いな…二人とも大丈夫か？』

防ぎきった後、二人を確認すると大丈夫そうだったが、フェイトが恐がっているみたいだった。

（……アルフ。今日はもうフェイトを連れて戻った方がいい。今

なら管理局に追われる心配もない）
（……わかったよ。この前の魔導師も来たみたいだからね）
いつの間に来ていたのか少し遠くにクロノがいた。
『……じゃあジュエルシードはきっちり半分ずつってことで』
「……」
「フェイト！行こう！」
分けられた三つのジュエルシードをアルフが受け取るとフェイトを連れてすぐに転移していなくなった。
「あっ……フェイトちゃん……」
『なのは……』
なのはがしばらくフェイトがいなくなった所を見ているとクロノが声をかけてきた。
「……神童、今のは魔法なのか？」
『いや、少し違うかな……まぁ説明は後にするとして、ほらっ。今回のジュエルシード。それにしてもなんでわざわざここに来たんだ？』
「君達を迎えに来たんだ……今回の勝手な行動については艦長から話がある。だからそろそろアースラに戻ろう」
「……ごめんなさいクロノ君」
「僕に謝ってもらってもしょうがないよ……じゃあ転移頼んだよ」
「わかりました」
クロノがユーノに転移を頼んで三人が集まっていたが、俺は一人その場から離れていった。

『悪い、先に戻っててくれ』
「どうしたの零くん？」
『……借りを返しておかないといけないやつが来た』
俺の視線の先には相変わらず仮面をつけているあいつがいた。
「あの仮面の子は？バリアジャケットが零くんと色ちがいだけど…」
『わからない…だけどこの前はいきなり襲われたし、あんだけそっくりなんだ……何かしら俺に関係があるんだろ……多分今から戦闘になるだろうから巻き込まれないように早くアースラに戻ってくれ』
さすがに流れ弾から守りながらはキツイからな。
「……わかった。二人ともアースラに戻ろう」
「クロノ君！？でも零くんを一人おいていくなんて…」
「僕達もサポートぐらいなら」
「いや…僕達がここにいると逆に神童の邪魔になるだろう。封印の時やさっきの魔法を見てわかった」
『クロノ……戻ったのを確認したら完全にこの空間を結界で隔離するから終わったら俺もアースラに戻るよ。後、イリスにはアースラで待機と伝えといてくれ』
そう言った後、まだ二人がなにか言いたそうな顔をしていたので強制的にアースラに転移させ結界を張りなおして外に影響がいかないようにした。
『これでよしっと…アースラから確認ができなくなっただろうけどそれはそれで都合がいいな』

「Ｗａｒｎｉｎｇ」
『っと！他がいなくなったらいきなりかよっ！！！』
レグルスの警告を聞いて、正面から斬りかかってきたのを避けながらカウンターの蹴りを顔面に入れて一度距離をとった。相手を見ると仮面が砕け落ちて顔が見えるようになった。
『バリアジャケットもデバイスも同じだからまさかとは思ってたけど……顔も同じとはな』
仮面の下から出てきたのは俺と同じ顔で、まるで鏡を見ているようだった。
「……」
『お前……名前はあるのか？』
「……ゼロ」
仮面が壊れただけでダメージはないのか双剣を構えながら俺の質問に答えた。
『ゼロか…じゃあなんで俺を襲う？お前の目的は？』
「……監視」
『監視……？なんで俺を…いやそれならなんで襲ってくるんだ？』
「……」
『答える気はなしか……それなら力ずくで聞きだすしかないな。こっちもタイプ３だレグルス』
「Ｓｗｏｒｄｆｏｒｍ　ｔｙｐｅ３」
こちらも双剣を構えていつでも動けるようにした。

『それじゃ…始めますか！！！』

一瞬の内にゼロまでの間合いを詰める。
人間、だれしも動き出すときに初動がうまれる。
加速するまでには時間がかかってしまうが、このタイプ3は極限まで速さを出せるように考えたフォルムなのでほぼノーモーションで動きだせる。

「……！」

最速の一撃を入れようとするが動きが見えているのかなんなく片手で受けきられた。
しかしその一撃だけでは止まらずさらに剣を振る。

二撃、三撃、四撃、五撃、六撃、七撃、八撃、九撃、十撃

さらに加速していき討ちあう斬撃で火花が飛び散る。最早第三者がこの光景を見たら二人の姿は見えないだろう。

『…ちっ！このままだときりがないな』

今までの速さを意識した攻撃とは違い、力をいれて交差させた腕からXの字の斬撃を繰り出してゼロをはじきとばした。

「――憑依経験、共感終了」

……おいおい、まさかあれって…

「――工程（ロールアウト）完了。停止解凍（フリーズアウト）。全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）」

ゼロの詠唱が終わると目の前から膨大な魔力が感じられた。

『っく！劫（アイオン）の眼、解放！』

俺の両眼が黒から金に変わって自分以外の動きが遅くなっていく。劫の眼は未来を見ることができる。しかしその能力が真価ではないが今はこれだけでも十分だ。

世界が完全にスローモーションになると俺の周囲をいつのまにか何十、何百もの剣が取り囲んでいる光景が眼に映った。

（やっぱりこいつ、ゼロも俺と同じ能力が使えるらしいな…しかし投影とは……好みも一緒なのかね！）

俺はすぐにその場から下がって劫の眼を解除した。

その瞬間世界が元に戻って、俺がいたところに視た光景と同じように何本もの剣が現れて一斉に放たれた。

『あぶね～あぶね～。それにしても、能力まで同じとは……マジでお前はなんなんだ？』

「……先ほどから問いばかりだな。逆にこちらから問うがお前は何故力を欲する？」

『初めて話す気になったと思ったら……そんなのお前がこの前襲ってきたからだろ！ご丁寧に弱いとか一言残していきやがって！だから俺は「違う」……違うって……』

「俺が聞いているのはそちらの力ではなく■■■■■のほうだ」

『っ！どうしてそのことを！？……なるほどね、監視ってのは嘘じゃなさそうだ』

「わかっているのか？自分がやろうとしていることが？」

『……』

「そのことをもう一度考えておくんだな」

それだけ言い残すと、前のようにいきなり転移していなくなった。

『……アイツ。どこまでわかってんだ？』

しばらくその場で考えていたけど、いつまでもここにいてもしょうがないと思い結界を解いてアースラに転移した。

『ふぅ。戻ってきましたよっと』

「「「「「零（くん）、神童！！！」」」」」

俺が戻ってきたのがわかるとイリスとなのはが泣きそうな顔で駆け寄ってきた。

「零！！！大丈夫だった？クロノ君からあの仮面の子がまた出たって聞いたからすぐに向かおうとしたけど無駄に強い結界が張ってあっていけなかったから心配で！」

「零くん！どうしてあの時無理やり私達を転移させたの？すっごく心配したんだから！」

『ちょっ！二人ともわかったから大丈夫だって、ほらっ！なんともないから』

俺が必死に二人をなだめているとクロノが聞いてきた。

「それで……あの仮面のやつは？」

『ん？……あぁ、結局なにもわからないまま、またいなくなった。だけど、ジュエルシードとは関係なく俺が目的らしいからそっちには問題ないだろ』

「……そうか」

「……？零なにかあったの？」

俺の雰囲気になにか感じたのかイリスが心配して聞いてきた。

『いや、なんでもないよ。……さて！全部のジュエルシードが見つかったことだし、これからの作戦でもたてますか！』

ごまかすように後ろを振り向くと、そこにはなぜか怒っているリンディさんがいた。

『……？……あ』

そういえば命令無視して勝手に現場に向かったの忘れてた……

「そのまえに神童君たちには私じきじきのお叱りタイムです！」

その後、リンディさんの説教を数時間におよんで聞かされた。

第十七話　再来（後編）（後書き）

作者〔・・・・・・・・・・・・・・・〕

零［とりあえず言い訳があるなら聞くけど］

作者〔いえ・・・なにもありません。ただただ申し訳ありませんでしたとしか・・・・・ｏｒｚ〕

零［さすがに更新遅すぎでしょ・・・］

作者〔・・・・・・・（土下座の体勢のまま返事がない、ただの屍のようだ）〕

零［ったく！読者の皆様方、こんな作者が書いているのを読んでいただいて感謝感激です。こんなですけれどがんばって書いているので長い目で見てやってください。それでは次話でお会いしましょう！］

作者〔・・・・・・・・・・・・・・・（返事がないただの屍のようだ）〕

第十八話　いきなりできた休日はどう過ごすか迷う（前書き）

日常パートをもっと面白く書けるようになりたい・・・

第十八話　いきなりできた休日はどう過ごすか迷う

時の庭園

アルフ　Ｓｉｄｅ

「フェイト！フェイト！！……っ！」

倒れてるフェイトに駆け寄ってその姿を見ると、鞭で打たれた跡が痛々しく残っていた。フェイトは疲れ果てたのか眠っている。

「アイツ…いくら母親だろうともう我慢の限界だ！」

眠っているフェイトに毛布のかわりに自分のマントをかけて、あの女がいる場所に向かった。

「ここか……ハァァ！！！」

壁をぶち壊して中に入るとそこにフェイトの母親であるプレシア・テスタロッサがいた。

その姿を見た瞬間に私は走り出していた。

「よくもフェイトにあんな酷いこと！！！……くっ！シールド！？」

つかみ掛かろうとするとシールドに阻まれた。

「くぅ……！！！こんな…ものぉ！！！！！」

邪魔なシールドを砕いてプレシアの胸倉を掴んだ。

「アンタは母親で！あの子はアンタの娘だろう！！！あんなにがんばってる子に……あんなに一生懸命な子に…なんであんな酷いことができるんだよ！！！」

問い詰めてプレシアの顔を見ると、一瞬悲痛な顔をしたのがわかった。だけど、その直後に腹部に痛みを感じ気がついたら壁までぶっ飛ばされていた。

「ぐっ……！」

「あの子は使い魔の作り方が下手ね。余分な感情が多すぎるわ」

「フェイトは…アンタの娘はアンタに笑ってほしくて…優しいアンタに戻ってほしくて、あんなに！」

「……邪魔よ。消えなさい！！！」

プレシアがトドメをさそうと杖から魔法を放ってきた。私はとっさにシールドを張って直撃は避けたが、威力が高く時の庭園の外まで放り出された。

（どこでもいい……転移しなきゃ！…ごめんフェイト。少しだけ待ってて…）

アルフ　Ｓｉｄｅｏｕｔ

高町家

『ふぅ……恭也さん。今日はありがとうございました』
「ああ。だけどいまだに信じられないな…確か神童はなのはと同い年だよな？どうしてそんな実力を？」
「えっへん！零は強いでしょ♪」『なんでイリスが誇らしげな顔してるんだよ……え～とですね、まぁいろいろとあってということで…そろそろなのは達のところに戻りましょう』
「……そうだな。そうするか」

今、俺とイリスはなのはの家に来ている。

海にあった6個のジュエルシードを封印してから、アースラに戻ってリンディさんに説教されてからこれからどうするかを話した。

そこでクロノがエイミィに調査させてたのか今回の事件にプレシアさんが関わっていると報告した。
リンディさんはさらにプレシアさんの情報調査をエイミィに任せて、あれだけの魔力を使ったのだから2～3日はあちらも動けないと予測して、俺達を一度海鳴市に帰すということになった。
海鳴に戻ってなのはを家まで送った時に（なぜかリンディさんも来ていた）玄関先で恭也さんに捕まり今に至る。

（まさか恭也さんがこんなに負けず嫌いだとは気づかなかった）
（零も大変だね…前に模擬戦頼んでから、会うたびに一戦するよう頼まれるようになったんだよね？）
（一番最初の時に上手く力を抑えられなくて士郎さん以上の実力を見せちゃって。それから二人ともだよ……まぁ訓練になるからいいんだけどな）

道場からなのは達のところに戻る時にイリスと念話で話しながら家にお邪魔させてもらった。

「……と、そんな感じの十日だったんですよ～」
「まぁ！そうなんですか」

（リンディさん…見事なごまかしというか…真っ赤なうそというか）
（本当のことは言えないんですから。ご家族にご心配をかけないための気遣いと言ってください）

「本当になのはさんはいい子で、うちのクロノはどうも愛想がなくて」
「いえいえそんな～」

道場から戻って来るとまだリンディさんと桃子さんが話していた。

『あれ、まだ話してたんすか？』

「あら？零君に恭也もお疲れ様～。あっ！イリスちゃんケーキでも

食べる？」
「わ～い！ありがとう桃子さん！」
『ったく……すいません』
お礼を言うと桃子さんは笑いながらケーキと紅茶をイリスに持ってきてくれた。
「なのは、今日明日くらいは家にいられるんでしょ？」
「うん！大丈夫だよお姉ちゃん」
「アリサもすずかちゃんも心配してたぞ。もう連絡はしたか？」
「うん。さっきメールを出しといたから心配ないよお兄ちゃん」
俺も桃子さんにもらったケーキを食べていると、なのはがさっきからちらちらと俺を見ては何かを言おうとするが言えないという様子がかなり気になった。
『どうしたのは？俺の顔になにかついてるか？』
「ふぇ！？な、な、なんでもないよ？」
『いや…あからさまになんかありそうなんだが…』
……？まぁいいか。
隣にいるイリスを見るとケーキを食べ終わったのか紅茶を飲んでいた。
『さて、そろそろ家に帰るか。桃子さんケーキありがとうございました』
「あら、もう帰るの？もっとゆっくりしていってもいいのに」
「そうだよ～。もっとゆっくりしていこうよ～」
『あのな…って！ケーキと紅茶をおかわりするな！桃子さんも持っ

てこなくても大丈夫ですよ！……ったく、家に帰って飯作るのお
r「あ！あの！零くん！？」……なのは？』

イリスに帰ると言い聞かせようとすると、なのはが突然恥ずかしそうにしながら緊張気味にその言葉（ばくだん）を放った。

「あの…／／／／／今日はうちに泊まっていかない？」

爆心地→俺

「ぶぅーーーー！！？！？！」
『おわぁ！！！イリス！こっち見ながら紅茶を吐くなぁぁぁ！！！！！』
「あらあら、なのはからそんなことを言うなんて…よっぽど仲がいいのね」
「な、なな！？な、ななな！？」
「ちょ！恭ちゃん落ち着いて！道場に真剣を取りに行っちゃダメだってばぁ！！！」

みんなが落ち着くまで時間がかかりました……

「それで…ダメかな？」

なのはが再度俺に聞いてくる。……近くで見るとマジでかわいいから困るんだよなぁ。

『ダメっていうか……ほらっ！二人も泊まる事になると部屋が「

空き部屋がいくつかあるから大丈夫よ」……それに俺達が泊まるのに反対な人が「いないから大丈夫よ」「ちょ、ちょっと待った！俺は反対「いないわよね？」…うん。まぁ、いいんじゃないかな…」……イリスはどう「イリスちゃんお菓子もケーキもまだたくさんあるからどんどん食べてね」「わ～！ありがとう桃子さん！」……

……』

なぜだかわからないけど、桃子さんはどうしても俺達を泊めたいらしい……正直断れる気がしません。

『はぁ…わかったよ。それじゃあ今日はお世話になります』

なのはの家に泊まることが決まった後リンディさんがアースラに帰って、俺とイリスは泊まらせてもらう空き部屋にいた。

『やっぱりというかなんというか…二人で一部屋なんだな』

「一応私たちは家族ってことになってるし、一人一部屋なんて贅沢言えないからしょうがないよ♪」

『だよな～。てか、なんかご機嫌だな？』

「うん！だって久しぶりに零と一緒に寝れるからね♪」

せっかくの休みなのに今日は一睡もできない事確定だな。

コン　コン

そんな事を考えてるとドアからノックの音が聞こえてきた。誰かなと思ってドアを開けるとなのはだった。

「零くん、今からちょっといいかな？」
『え？ああ、別にいいけど…ユーノは？』
「それが……ユーノ君はお母さんとお姉ちゃんに…」
『捕まったと、それはご愁傷様だなユーノ。にしてもなのはが急に泊まっていかないって言ったときは驚いたよ』
「うん…実はお願いと聞いてほしい事があったんだ……私がこれからどうするか」
『……わかった。聞かせてくれ』

それからなのはは、フェイトとこれからどう決着をつけるか、決着をつけるための力が自分には足りないなど、自分の思いを一生懸命に話してくれた。

『なるほどね。（やっぱり原作通りに一対一の勝負になるんだな）……だけど今のなのはがフェイトに勝つのは結構厳しいぞ？』
これは嘘じゃない。なのはは最大魔力値でならフェイトを上回っているかもしれないけど、戦闘技術、知識、経験においてはまだ追いつくことはできない。
「そうだよね。そこで零くんにお願いしたいんだ……私が考えた“必殺技”の特訓を！！！」

翌日

「零！零ってば起きて！もうお昼だよ！」

自分の体が揺さぶられているのに気づいて目を覚ますと、イリスが起こしてくれていた。

『……おはよ』

なんとか二度寝したい欲求を抑えながら時間を見ると昼の１２時過ぎだった。

『ん～～～！久しぶりによく寝た気がする』

「実際よく寝てたよね。昨日も私より早く寝ちゃってたし……（まぁ、そのおかげで一緒に寝るときにいっぱいくっつけたからよかったけど）」

……そういえばそうだった。昨日はなのはの訓練が終わった後、疲れがたまってたのかすぐに寝たんだっけ。

「それで今日はこれからどうするの？」

『確か今日はなのはがアリサの家に遊びに行く事になるから、俺も一緒に行かせてもらうかな。イリスはどうする？』

「私は桃子さんにお礼がしたいから今日はお店のお手伝いをしてるよ！」

『そっか。お礼はいいけど逆に迷惑かけないようにするんだぞ？』

「大丈夫！それじゃあ何かあったら連絡してね！」

そう言ってイリスが翠屋の手伝いに行ったので、俺もアリサの家に行くためになのはに念話をした。

（お～い。なのは聞こえるか？）
（零くん！ちょうどよかった！あのね、もしかしたらアリサちゃんの家にアルフさんがいるかもしれないの…だけどアリサちゃんが言うにはケガをしてるって）
（……怪我か…なのはは今日アリサの家に行くのか？）
（うん。アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に遊ぶことになってるよ）
（俺も本当にアルフかどうか確認したいからアリサに俺も家に行っていいか聞いてくれないか？）
（わかった！ちょっと待っててね……オッケーだって）
（そっか、じゃあ学校が終わるぐらいに校門のところで待ってるよ）

これでよしっと……土産に翠屋のケーキでも持ってかな。

数時間たって俺は聖祥大附属小学校の校門前にいた。
……なのは達早く来ないかな。なんか俺かなり目立ってるんだよ

ね。さっきから帰宅する生徒達の視線が……女の子からは好感の雰囲気なんだけど、野郎からは若干負のオーラが……

「零く～ん！ごめんね待たせちゃった？」
「久しぶりだね零くん」
「いきなりうちに来たいってなのはから聞いたときは驚いたんだから」

うわ～殺気が！さっきより男子生徒からの殺気が強くなってるって！！！

『……悪いんだけど早くアリサの家に行きたいんだけど（ここにいるといつか殺られそうだ）』
「「「？？？」」」

うん…そういえばここにいる三人は学校でトップクラスの可愛さだったね。今度ここに来るときは気をつけよう。
それからすぐにアリサの執事の…え～と確か鮫島さんだったかな？が迎えにきてアリサの家に向かった。

「ほら、これが昨日拾った子。すごく大きいでしょ？」

（やっぱりアルフさん…）
（アンタか……それに零も）
（そのケガどうしたんですか？それにフェイトちゃんは？）
（……）

「あららら、元気なくなっちゃった。どうした～？だいじょうぶ～？」
「傷が痛むのかも。そっとしておいてあげようか」『みんな先に行っててくれないか？俺はもう少しここにいたいから』
（なのは、話は俺が聞いておくからアリサ達といてくれ）
（…わかった）
「それじゃあ私達はお茶でもしてるから早く来なさいよ！」
『了解！』
（……さてと、何があったか聞かせてくれるか？）
（あんたなら信頼できるけど…どうせ管理局の連中も見てるんだろう？）
（まぁ…な）
（時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ…正直に話してくれれば悪いようにはしない。君のことも……君の主、フェイト・テスタロッサのことも）
（アルフ…大丈夫だ。俺も協力して絶対になんとかしてやるから）
（……わかった。話すよ、全部。だけど約束して！フェイトを助けるって！あの子は何も悪くないんだよ）
（約束する…エイミィ記録を（やってるよ））
それからアルフは、今までフェイトがプレシアさんにされてきたことを話した。
（なのは、聞いたかい？）
（うん、全部聞いた）

（君の話と、現場の状況、そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾はないみたいだ）
（どうなるのかな？）
（プレシア・テスタロッサを捕縛する！アースラを攻撃しただけでも逮捕の理由にはおつりがくるからね。だから僕達は艦長の命がありしだい、任務をプレシアの逮捕に変更することになる）
（……）
（君達はどうする？高町なのは、神童零）
（私は……私は！フェイトちゃんを助けたい！！…アルフさんの思いと、それから私の意志！フェイトちゃんの悲しい顔は…私もなんだか悲しいの。だから助けたいの…悲しいことから。それに、友達になりたいって伝えたその返事をまだ聞いてないしね）
（俺は前と変わらず自分がしたいようにするさ）
（…わかった。こちらとしても君達二人の魔力を使わせてもらえるのはありがたい。フェイト・テスタロッサについては二人に任せる。それでいいか？）
（……零、それになのはだったね…頼めた義理じゃないけど、だけどお願い。フェイトを助けて！あの子は今、本当に一人ぼっちなんだよ）
（（任せろ【て】！！））

『一段落ついたし、なのは達のところに行くかな。じゃあアルフ、また後で』

その後は日が暮れるまでみんなで遊んで、完全に日が沈んだところで家に帰ることにした。

『ただいま』
「おかえり～。それでどうだった？」
『……原作通り、明日が大詰めになる。なのはとフェイトの一対一、それから時の庭園に乗り込むことになるだろうな』
「そっか……」

それだけ話すとイリスも俺も黙ってしまった。

……これは勘だけどイリスは俺がやろうとしている事に感づいてるかもしれない……

そんな事を考えながら、明日に備えて今日は早く寝る事にした。

第十八話　いきなりできた休日はどう過ごすか迷う（後書き）

作者〔久しぶりに投稿できた！〕

零［本当に久しぶりだな……読んで下さっている読者様には感謝感激です！］

作者〔そして今回の後書きでは今まで零が使ってきた魔法や技について書かせてもらおうと思います！〕

零［つってもまだ全然使ってない気がするけど…］

作者〔そこは気にせず……じゃあまずはオリジナル魔法から！〕

ダークネススフィア：属性【闇】・・・零がゼロに使った殲滅系の魔法。ブラックホールをイメージ。

ブレイクショット：【無】・・・ジュエルシードを取り込んだ木との戦闘時に使用。まぁ、これは弾丸が魔力弾になってるだけ。ちなみに色は黒。

フリーズドランサー：【凍】・・・同じく木の時。この時は弾丸として撃ち込んだが、本来は魔力で氷の刃を作り相手に放つ魔法。魔力の限り刃の本数を増やせる（零の場合はやろうと思えばそれこそ無限）

???：【?】・・・フェイトが車に轢かれそうになった時に使っ

た。

ダイアモンドダスト：【凍】・・・海上で暴走したジュエルシード複数個を抑えるために使用。全てを凍らせる殲滅系（イメージはＦＦ８のシヴァの技…わかる人はわかるｗ）

作者〔オリジナルはこれくらいかな？〕

零〔やっぱりまだまだ少ないな〕

作者〔まぁ戦闘がどうしても少ないし（言い訳）もっと戦闘シーンを上手く書ければいいんだけど…〕

零〔それはどんどん書いていくしかないだろ。さて、次はゲームから使わせてもらった技だな〕

ローアイアス：【Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ】・・・アーチャーと衛宮士郎が投影して使う防御用宝具。花弁（零はアーチャーと同じように七枚）を展開する形で、その一枚一枚が城壁並の防御力がある。

アイオンの眼：【１１ｅｙｅｓ】・・・皐月駆が使うチート眼。未来を見ることができる。（だけど本来の能力は反則だろｗ）

零〔まぁこんぐらいだな。ちなみにゼロもＦａｔｅの投影を使ってたな〕

作者〔後は補助系のやつだしね。これからもっと他の力を使わせていくよb〕

零〔望むところだ！それで次話はどうするんだ？〕

作者〔次回はついに悪魔が…いやいや、魔王がその片鱗を見せます！〕

零〔……フェイト大丈夫かな〕

作者〔では次回もよろしくです！それでは！〕

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1184l/

魔法少女リリカルなのは〜憧れのアニメの世界へ〜

2010年10月10日08時09分発行